

北久米遺跡 2次調査地 南久米町遺跡 4次調査地

2 0 0 4

松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

きたくめ
北久米遺跡 2次調査地
みなみくめまち
南久米町遺跡 4次調査地



2 0 0 4

松山市教育委員会

財團法人 松山市生涯學習振興財團

埋藏文化財センター

序

松山平野の南東部に位置する久米遺跡群内には、古墳時代の大規模な集落遺跡である福音小学校構内遺跡や、古代役所の中権施設と推定される久米高畠遺跡群などの重要な遺跡の調査が進められ、当地域における遺跡の全容が明らかになりつつあります。

今回報告します北久米遺跡2次調査からは、隣接する福音小学校構内遺跡で確認された古墳時代の大集落につながる竪穴式住居址や掘立柱建物跡などの遺構を検出し、大集落の範囲がさらに南方に広がることが確認できました。また、南久米町遺跡4次調査では、東に位置する南久米町遺跡2次調査で確認した古代の溝にはば直線的につながる溝を検出し、この溝が南隣の南久米町遺跡で確認された古代の掘立柱建物群を区画する様相を示唆する資料となり、当地域における古代集落の景観を復元する貴重な成果を得ることができました。

こうした成果をあげることができたのも、市民の皆さまの埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のお陰と感謝いたしております。

今後とも、なお一層のご指導、ご助言を賜りますよう、よろしくお願い申しあげます。また、率いては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成16年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財團
理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センターが平成12年度から平成13年度の間に松山市北久米町766番1、松山市南久米町420番地1、422番地で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺物の実測・製図および遺構の製図は、担当調査員の指導のもと、山邊進也、猪野美喜子、安井由起美が行った。
3. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：S B、掘立柱建物址：掘立、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P、性格不明遺構：S Xとした。
4. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
5. 本書に使用した方位はすべて真北である。
6. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
7. 本書の執筆は、河野史知が執筆し、梅木謙一の協力を得た。
8. 写真図版は、担当調査員と協議のうえ、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。
9. 編集は河野史知が行った。
10. 製版写真図版175線
印刷 オフセット印刷
用紙 本 文 マットカラー110kg
写真図版 マットカラー135kg
製本 アジロ綴じ

本文目次

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯	1
2. 刊行組織	1
3. 環境	2

第2章 北久米遺跡2次調査地

1. 調査の経過	7
2. 層位	10
3. 遺構と遺物	15
(1) 弥生時代	15
(2) 古墳時代	18
(3) 中世	27
(4) 柱穴出土遺物	28
(5) 第Ⅳ層出土遺物	29
(6) 第Ⅴ層出土遺物	29
4. 小結	30

第3章 南久米町遺跡4次調査地

1. 調査の経過	39
2. 層位	42
3. 遺構と遺物	49
(1) 古代	49
(2) 中世	51
(3) 近世	52
(4) 古代～近世	57
(5) 近世～近現代	57
(6) その他	57
(7) 第Ⅲ層出土遺物	58
(8) 第Ⅱ層出土遺物	60
(9) 第Ⅰ層出土遺物	60
4. 小結	61

第4章 成果と課題	67
-----------	----

挿 図 目 次

第1章 はじめに

第1図 松山平野の地形分類図 (S=1:200,000)	2
第2図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1:25,000)	4

第2章 北久米遺跡2次調査地

第3図 調査地周辺遺跡の位置図 (S=1:3,000)	8
第4図 調査地区割図 (S=1:200)	9
第5図 B区土層図 (S=1:60)	10
第6図 A区土層図 (S=1:60)	11
第7図 遺構配置図 (S=1:100)	13
第8図 S B 3測量図 (S=1:50)	15
第9図 S B 3出土遺物実測図 (1) (S=1:4)	16
第10図 S B 3出土遺物実測図 (2) (S=1:4)	17
第11図 S B 1測量図 (S=1:40)	18
第12図 S B 2測量図・出土遺物実測図 (S=1:40・S=1:3)	19
第13図 掘立1測量図 (S=1:50)	20
第14図 掘立2測量図 (S=1:50)	21
第15図 掘立3測量図・出土遺物実測図 (S=1:50・S=1:3)	22
第16図 掘立4測量図 (S=1:50)	23
第17図 掘立4出土遺物実測図 (S=1:3)	24
第18図 掘立5測量図 (S=1:50)	24
第19図 掘立6測量図 (S=1:50)	25
第20図 S D 2測量図・出土遺物実測図 (S=1:40・S=1:3)	26
第21図 S D 3測量図 (S=1:40)	26
第22図 S K 1測量図 (S=1:40)	26
第23図 S D 1測量図・出土遺物実測図 (S=1:150・S=1:3)	27
第24図 S P 8測量図・出土遺物実測図 (S=1:20・S=1:8)	28
第25図 柱穴出土遺物実測図 (S=1:3)	28
第26図 第IV層出土遺物実測図 (S=1:3)	29
第27図 第V層出土遺物実測図 (S=1:3)	29

第3章 南久米町遺跡4次調査地

第28図 周辺の遺跡分布図 (S=1:4,000)	40
第29図 調査地位置図 (S=1:600)	41
第30図 調査地区割図 (S=1:300)	42
第31図 東・南壁土層図 (S=1:40)	43
第32図 西・北壁土層図 (S=1:40)	45
第33図 遺構配置図 (S=1:100)	47

第34図	S D 10測量図 (S = 1 : 40)	49
第35図	S D 3・13測量図 (S = 1 : 40)	50
第36図	掘立1測量図・出土遺物実測図 (S = 1 : 30・1 : 3)	51
第37図	S D 1・2・4測量図 (S = 1 : 50)	52
第38図	S D 4出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	52
第39図	S D 5・6測量図 (S = 1 : 40)	53
第40図	S D 5出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	54
第41図	S D 6出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	54
第42図	S D 7・8・9測量図 (S = 1 : 50)	55
第43図	S D 11・12測量図 (S = 1 : 40)	56
第44図	S K 1測量図 (S = 1 : 30)	56
第45図	S K 1出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	57
第46図	跡跡測量図 (S = 1 : 150)	57
第47図	跡跡出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	57
第48図	倒木痕測量図 (S = 1 : 30)	58
第49図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (1) (S = 1 : 3)	59
第50図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (2) (S = 2 : 3)	60
第51図	第Ⅱ層出土遺物実測図 (S = 1 : 3・2 : 3)	60
第52図	第Ⅰ層出土遺物実測図 (S = 1 : 3・2 : 3)	60
第4章 成果と課題		
第53図	北久米遺跡2次調査地の時代毎の変遷 (S = 1 : 300)	68
第54図	古代の主要遺跡配置図 (S = 1 : 500)	69

表 目 次

第1章 はじめに

表1	調査地一覧	1
----	-------------	---

第2章 北久米遺跡2次調査地

表2	竪穴式住居址一覧	31
表3	掘立柱建物址一覧	31
表4	溝一覧	31
表5	土坑一覧	32
表6	S B 3出土遺物観察表 (土製品)	32
表7	S B 2出土遺物観察表 (土製品)	34
表8	掘立3出土遺物観察表 (土製品)	34
表9	掘立4出土遺物観察表 (土製品)	34
表10	S D 2出土遺物観察表 (土製品)	34
表11	S D 1出土遺物観察表 (土製品)	34
表12	S P 8出土遺物観察表 (土製品)	35

表13 柱穴出土遺物観察表（土製品）	35
表14 第IV層出土遺物観察表（土製品）	35
表15 第V層出土遺物観察表（土製品）	35

第3章 南久米町遺跡4次調査地

表16 掘立柱建物址一覧	62
表17 土坑一覧	62
表18 溝一覧	62
表19 掘立1出土遺物観察表（土製品）	63
表20 S D 4出土遺物観察表（土製品）	63
表21 S D 5出土遺物観察表（土製品）	63
表22 S D 6出土遺物観察表（土製品）	63
表23 S D 6出土遺物観察表（軒丸瓦）	64
表24 S K 1出土遺物観察表（土製品）	64
表25 鋤跡出土遺物観察表（土製品）	64
表26 第III層出土遺物観察表（土製品）	64
表27 第III層出土遺物観察表（石製品）	65
表28 第III層出土遺物観察表（鉄製品）	65
表29 第II層出土遺物観察表（土製品）	65
表30 第II層出土遺物観察表（鉄製品）	66
表31 第I層出土遺物観察表（土製品）	66
表32 第I層出土遺物観察表（鉄製品）	66

写真図版目次

図版1. 1 調査地全景（北東より）	調査地全景（北より）
2 遺構検出状況（西より）	表土掘削状況（南より）
図版2. 1 南壁土層（北より）	調査状況（南より）
2 調査状況（北より）	東壁土層（西より）
図版3. 1 S P 7・8半掘状況（東より）	遺構検出状況（南より）
2 S P 8遺物出土状況（東より）	2 S D 10検出状況（南東より）
図版4. 1 西拡張区遺構検出状況（北より）	図版11. 1 遺構完掘状況（北東より）
2 S B 3遺物出土状況（西より）	2 掘立1完掘状況（東より）
図版5. 1 西拡張区完掘状況（北より）	図版12. 1 S D 10完掘状況（東より）
2 遺構完掘状況（西より）	2 S D 10土層（西より）
図版6. 1 S B 3出土遺物	図版13. 1 掘立1出土遺物
図版7. 1 掘立4・S D 1・第V層・S P 8出土遺物	2 S D 4・S D 6・第I層出土遺物
	図版14. 1 第II層出土遺物
	2 第III層出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成11年度と平成13年度に、松山市北久米町、松山市南久米町の2ヶ所の地点について、埋蔵文化財の確認願いが地権者より松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。（表1）

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「116川附遺物包含地」・「126高畠遺物包含地」内にあり、周知の遺跡内にある。また、申請地周辺の北久米地区は北久米遺跡と呼称され、弥生時代から古代の集落地帯である。南久米地区は南久米町遺跡と呼称され、古代の集落地帯であったことが発掘調査で明らかとなっている。

よって、文化財課では、確認願いが申請された地点について、同地点の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、事前調査（試掘調査）を実施した。試掘調査の結果、各地で弥生時代から近世に至る遺構と遺物、包含層を確認した。

試掘調査の結果を受け、文化財課と申請者及び関係者は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、当該地域における古墳時代から近世にわたる集落構造解明を主目的とした緊急調査を実施するものとした。調査は文化財課及び財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり、申請者ならびに関係者各位の協力のもと、平成12年度と平成13年度の間に行われた。

なお、野外調査終了後は、埋文センターが主体となり、室内調査及び報告書刊行事業を実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積 (m ²)	調査期間
北久米遺跡 2次調査地	松山市北久米町106-1	639.62	平成12年7月10日～同年9月29日
南久米町遺跡 4次調査地	松山市南久米町420-1, 422	590.37のうち244.14	平成13年9月17日～同年10月16日

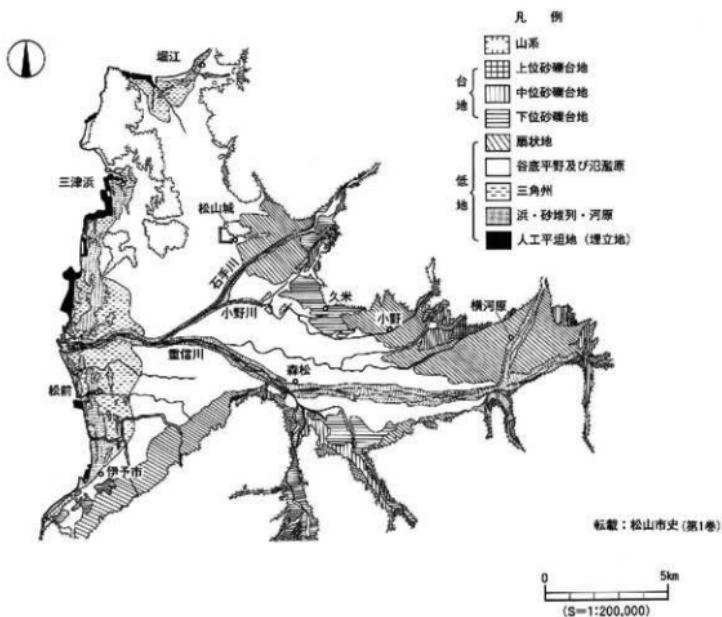
2. 【刊行組織】 平成16年3月31日現在

松山市教育委員会	教育長	中矢陽三
事務局	長	武井正浩
	企画官	遠藤宗敏
	企画官	石丸修
文化財課	長	八木方人
	幹事	家久則雄
	副主幹	田城武志
	副主幹	重松佳久
財団法人松山市生涯学習振興財團	理事長	中村時広
	事務局長	三宅泰生
	事務局次長	菅嘉見
埋蔵文化財センター	所長	杉田久憲
	専門監兼学芸係長	高木昌陽
	次長兼調査係長	西尾幸則
	副主幹兼管理係長	岸本照修
	調査員	河野史知・加島次郎

3. 環境

(1) 遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のはば中央部に位置し、伊予灘と齋灘に面し、南東部には石鎚山系、北部には高縄山系が聳える。平野は、高縄山に源を発した河川により形成された沖積平野である。この平野南東部において西流する小野川、その下流に分離独立丘陵「東山」がある。小野川を挟んだ東側対岸に星岡丘陵、南側対岸には天山丘陵が所在し、この3つの丘陵を俗に「伊予三山」と呼んでいる。この丘陵群に至る微高地の南西端に当遺跡は立地している。弥生時代より居住地及び耕作地として栄えてきたところである。東には古代の遺跡として知られる来住・久米の遺跡群がある。



第1図 松山平野の地形分類図

(2) 歴史的環境 (第2図)

当遺跡周辺には、数多くの遺跡が立地している。以下、これらの遺跡について時代別に記述する。

旧石器時代

東山窓が森古墳の調査よりサヌカイト製のナイフ形石器1点、天山天王が森遺跡より瑪賀安山岩製のナイフ形石器1点、釜ノ口遺跡よりチャート製のナイフ形石器1点と尖頭器1点が出土している。いずれも遺構とともに出土したものでない。

縄文時代

縄文時代は、この地域では後・晚期に限られ、来住台地上に立地する久米窪田森元遺跡の土壌より縄文後期の土器片が多数出土しており、数少ないこの時期の一括資料として貴重なものである。

晚期の資料には、南久米片廻り遺跡2次調査地から出土した土器群があげられる。朱塗りの壺と刻目凸帯を有する深鉢が出土している。

弥生時代

来住台地及びその周辺地域では、集落として弥生時代の人々の痕跡を認めることができる。久米窪田Ⅲ遺跡では、中期の堅穴式住居址や土墻墓などが検出されている。また、米住磨寺15次調査より良好な一括資料が出土している。後期では福音小学校構内遺跡から、壺棺、溝、区画溝、土器溜りが検出されており、集落の様相が明らかとなってきている。

古墳時代

星岡、東山をはじめとする独立丘陵には、6世紀から7世紀中葉にいたる円墳を中心とする小規模な古墳が多数分布する群集墳地帯である。集落跡は福音寺地区から淨蓮寺地区全体の広域に認められる。福音小学校構内遺跡では堅穴式住居址と掘立柱建物址が100棟あまり検出されている。淨蓮寺遺跡3次調査においては初期須恵器の遺が出土したのをはじめとして、5世紀前半から7世紀中葉にいたる堅穴式住居址や掘立柱建物、区画溝が検出されている。また、両遺跡の南に隣接する国道11号線の建設に先だって行われた調査においては、福音寺遺跡筋道地区、星岡遺跡北下地区をはじめとして、古墳時代の遺構・遺物が多く出土している。

古代

国指定史跡として知られる来住磨寺をはじめとして、官衙関連造構を多数検出している久米高畠遺跡があり、久米高畠遺跡は調査事例が50次を越え、寺院・官衙施設の構造も次第に解明されつつある。北久米淨蓮寺遺跡3次調査では、土坑や区画性をもつ溝が検出されている。

中～近世

来住磨寺15次調査において確認された土墻墓には17世紀前半の肥前系陶器が副葬されていた。天山と星岡等の独立丘陵は南北朝の昔、南朝が北朝を迎えた古戦場跡である。

【参考文献】

- 梅木謙・武正良浩 1995『福音小学校構内遺跡－弥生時代編－』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙・編 1992『来住・久米地区の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知編 1998『福音寺地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 武正良浩 2003『福音小学校構内遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

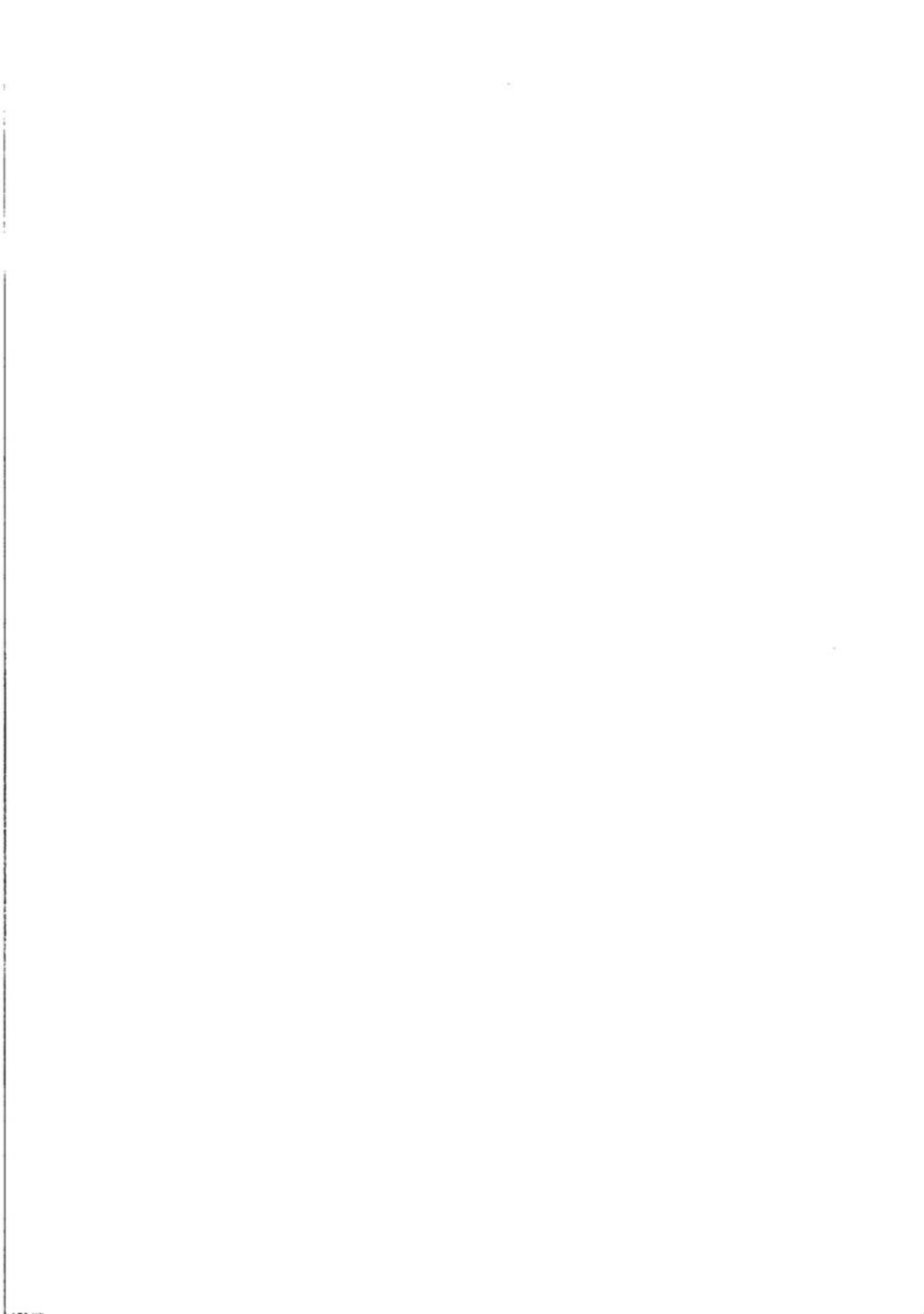


- | | | | | |
|------------|--------------|--------------|--------------|-----------|
| ①北久米遺跡 2次 | ②南久米町遺跡 4次 | ③福音寺遺跡(筋達A区) | ④福音寺遺跡(筋達B区) | ⑤筋達F遺跡 |
| ⑥筋達H遺跡 | ⑦筋達J遺跡 | ⑧北久米淨蓮寺 2次 | ⑨北久米淨蓮寺 3次 | ⑩北久米淨蓮寺4次 |
| ⑪北久米淨蓮寺 6次 | ⑫川附遺跡 | ⑬福音小学校構内遺跡 | ⑭天山神社遺跡 | ⑮東山窯が森古墳 |
| ⑯東山古墳 | ⑰北久米町屋敷遺跡 | ⑮来住魔寺 | ⑯来住町遺跡 | ⑰来住町遺跡4次 |
| ⑯南久米町遺跡 | ⑱南久米町遺跡 2-3次 | ⑲乃万の裏遺跡2次 | ⑳南久米斎院遺跡2次 | ㉑久米高畠遺跡7次 |
| ㉑久米高畠遺跡22次 | ㉒久米高畠遺跡32次 | ㉓谷南久米片廻り遺跡2次 | ㉔今在家遺跡 | ㉕繁成分遺跡 |
| ㉖開道跡 1次 | ㉗開道跡 2次 | ㉘久米窯田森元遺跡3次 | ㉙鹿ノ子遺跡 | ㉚鹿ノ子新畠遺跡 |

第2図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1:25,000)

第2章

北久米遺跡 2次調査地



第2章 北久米遺跡2次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

1999(平成11)年12月17日、仙波正彦氏より、松山市北久米町766番1における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.116川附遺物包含地』内に所在し、これまでに周辺では、数多くの発掘調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている。北隣には弥生時代と古墳時代を主体にする大集落跡の福音小学校構内遺跡、南東には古墳時代から古代までの集落跡を検出した北久米淨蓮寺遺跡、北西には弥生時代から古墳時代の集落関連遺構を主体とした筋走遺跡がある。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、2000(平成12)年1月7日に文化教育課は試掘調査を実施した。その結果、地表下25~50cmに土坑・溝・柱穴を確認し、須恵器片や土師器片の遺物も出土した。

これらの結果を受け、当該地における遺跡の取り扱いについて文化教育課の指導のもと、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)と申請者は協議を重ね、開発工事によって失われる遺跡に対し、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、調査地及び周辺地域における弥生時代から中世までの集落の広がりや集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者の協力のもと2000(平成12)年7月10日に開始した。

(2) 調査の経緯

平成12年7月10日、重機により遺構検出面である第VI層上面までの掘削を開始する。7月17日、人員を配し、遺構検出作業を開始する。8月5日、遺構検出作業が終了し、検出した堅穴式住居址・掘立柱建物址・土坑・溝等の遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影後、遺構の掘り下げを開始する。9月8日、遺構完掘状況の写真撮影を行う。9月12日、調査地西側を重機にて拡張する。9月13日、拡張区の第V層掘り下げを開始する。9月19日、福音小学校5・6年生児童(264名)を対象とした現場説明会を行う。9月25日、福音小学校の教職員とPTAを対象とした現場説明会を行う。9月28日、調査仮設事務所を撤去する。9月29日、道具類を撤去し、野外調査を終了する。

(3) 調査組織

調査地 松山市北久米町766番1

遺跡名 北久米遺跡2次調査地

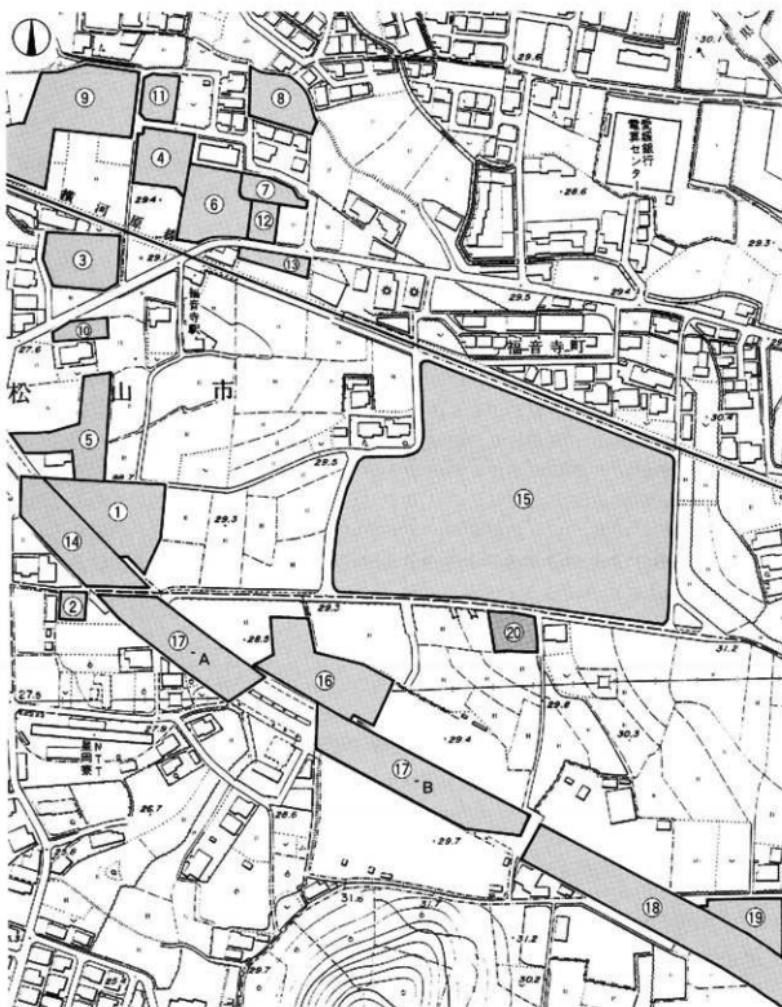
調査期間 2000(平成12)年7月10日~同年9月29日

調査面積 639.62m²

調査委託 仙波正彦

調査担当 河野史知・加鳥次郎

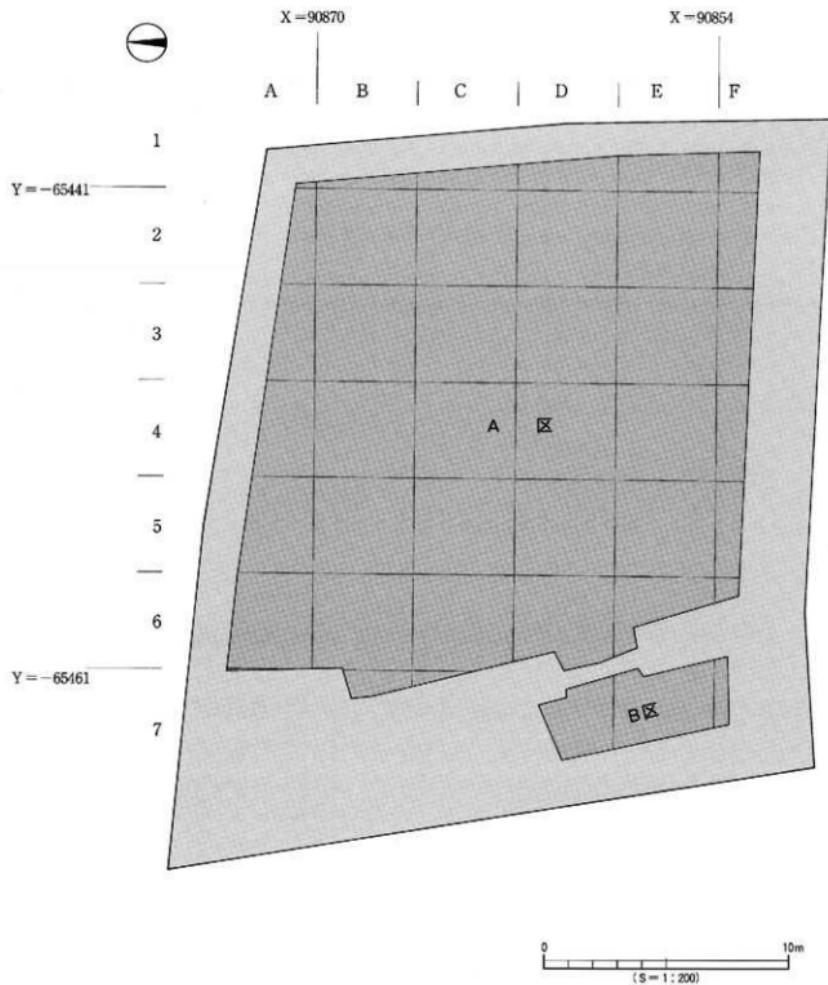
北久米遺跡 2 次調査地



- ①筋違C遺跡
- ②筋違D遺跡
- ③筋違E遺跡
- ④筋違F遺跡
- ⑤筋違G遺跡
- ⑥筋違H遺跡
- ⑦筋違I遺跡
- ⑧筋違K遺跡
- ⑨筋違L遺跡
- ⑩筋違M遺跡
- ⑪筋違N遺跡
- ⑫筋違O遺跡
- ⑬筋違P遺跡
- ⑭福音寺遺跡（筋違A・B区）
- ⑮乃万の裏遺跡 2 次調査地
- ⑯北久米遺跡（常堀地区）
- ⑰星ノ岡遺跡（⑯-A：旗立地区、⑯-B：北下地区）
- ⑱北久米常堀遺跡
- ⑲北久米遺跡 2 次調査地
- ⑳北久米遺跡 2 次調査地
- ㉑福音小学校構内遺跡

第3図 調査地周辺遺跡の位置図 (S=1:3,000)

調査の経過



第4図 調査地区割図

2. 層位 (第5・6図)

調査地は松山平野南部、低丘陵の平坦面の標高29.8mに立地し、調査以前は耕作地であった。基本層位は、第I層灰色土、第II層黄橙色土、第III層灰褐色土、第IV層灰オリーブ色土～橙色土、第V層褐色土～黒色土、第VI層黃色土である。なお、旧地形は北東より南西に傾斜している。

第I層 現代の耕作層で、厚さ10～20cmの堆積を測る。

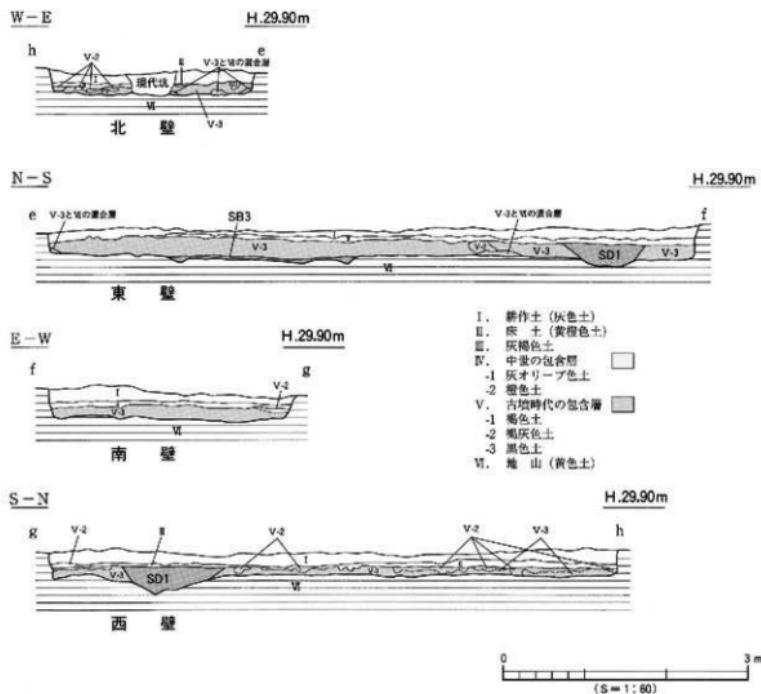
第II層 耕作土下の床土で、ほぼ全域に厚さ3～8cmの堆積を測る。

第III層 B区とA区の東端を除くほぼ全域に厚さ10～20cmの堆積を測る。

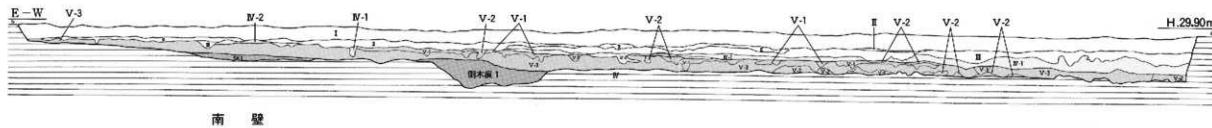
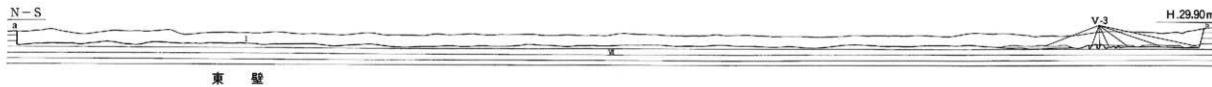
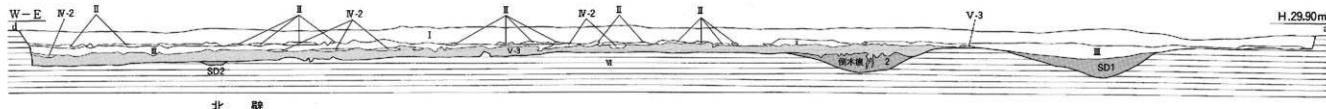
第IV層 調査区の地形の低い南西部にだけ堆積し、中世の遺物を包含する。厚さ8～20cmを測る。

第V層 調査区の東端を除くほぼ全域に堆積し、古墳時代の土師器・須恵器を包含する。厚さ10～25cmの堆積を測る。

第VI層 地山であり、調査区東側では5～10cm大の砾を含む。この層の上面において遺構を検出した。



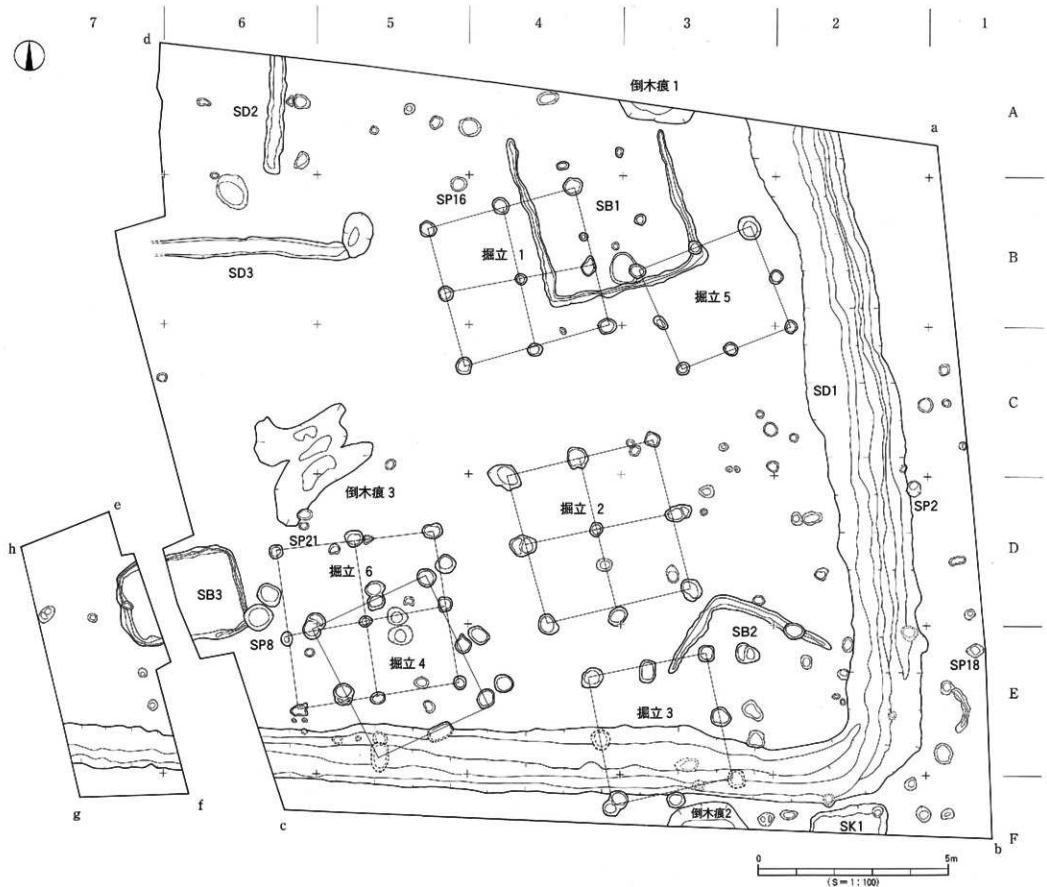
第5図 B区土層図



- I. 農作土(灰色土)
- II. 床土(黃褐色土)
- III. 灰褐色土
- IV. 中段の複合層
- 1 灰褐色リープ土
- 2 古褐色土
- V. 古墳時代の包含層
- 1 灰色土
- 2 灰褐色土
- 3 黒色土
- VI. 地(Ⅲ)(黃色土)



第6図 A区土層図



第7図 造構配置図

3. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代・古墳時代・中世の遺構や遺物を検出した。遺構には、竪穴式住居址3棟、掘立柱建物址6棟、溝3条、土坑1基、柱穴40基、倒木痕3基がある。遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶器がある。

(1) 弥生時代

1) 竪穴式住居址

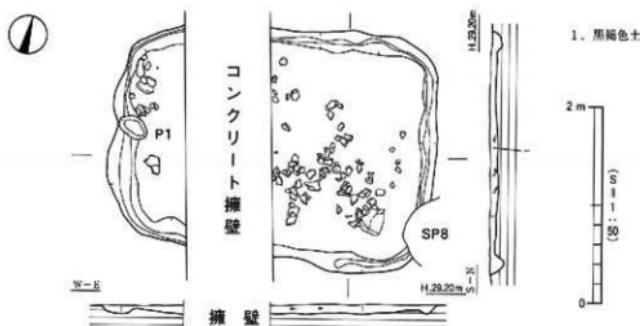
S B 3 (第8図、図版4)

調査区西側のD 6～7・E 6～7区に位置し、中央部やや西寄りの南北に延びる擁壁に、南東隅をSP8に切られている。平面形態は方形を呈し、規模は東西3.2m、南北2.4m、深さ10cmを測る。住居内施設は、周塙溝と西壁の中央部に柱穴(P1)を1基検出した。柱穴は平面形態が楕円形で、規模は長軸28cm、短軸20cm、深さ13cmを測る。住居址内の埋土は黒褐色土である。遺物は南東部の床面を中心に、破片が多く散乱しており、弥生土器の変形土器・壺形土器・鉢形土器等が出土する。

出土遺物 (第9・10図、図版6)

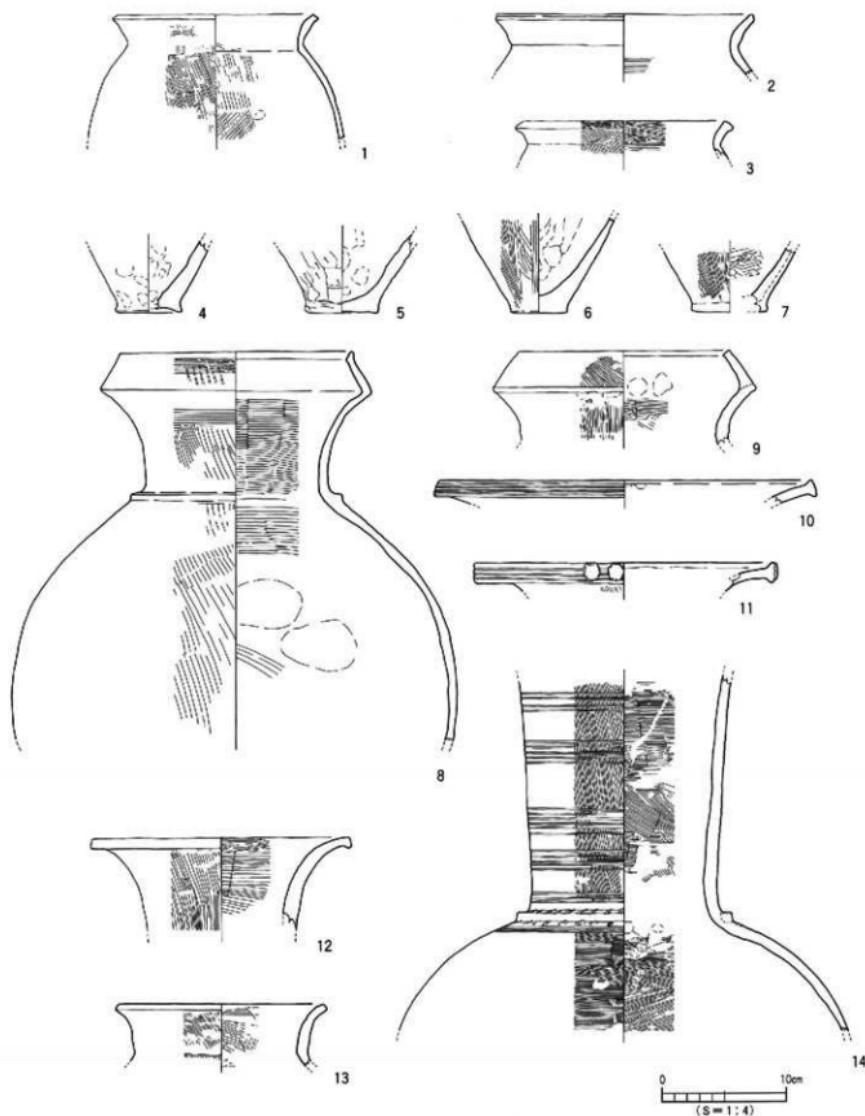
変形土器(1～7) 1・2は緩やかに「く」字状を呈する口縁部をもち、端部は1が平らな面をもち内外面に横ナデ、ハケ目がある。2は端部がやや凹み、外面に横ナデ、内面には横ナデ、ハケ目がある。3は緩やかに外反する口縁部に端部はやや外方に肥厚され平らな面をなし、内外面にハケ目がある。4はやや上げ底の底部付近がくびれ、内外面に指痕痕がある。5～7は平底の底部であり、5は外面がハラケズリ、内面には指痕痕がある。6は外面にハケ目、内面はナデである。7は内外面にハケ目がある。

壺形土器(8～19) 8・9は複合口縁壺である。8は頸部に断面三角形の凸帯をもち、内傾した拡張部の端面は不明瞭な段を有し、内外面にはハケ目がある。9は内傾する拡張部の端面は平らな面をなし、内外面にはハケ目がある。10・11は大きく外反する口縁部の端部に、10は4条の沈線文、11は3条の沈線文が巡り、内外面は横ナデである。12は大きく外反する口縁部に端部は平らな面をなし、下方に肥厚され、内外面にハケ目がある。13は直立気味の口縁部に端部付近は外反し、内外面はハケ目後横ナデである。14は直立気味の頸部に3～6条の沈線文が5段以上巡る。胴部との境に貼り付け凸帯が巡り、その上下に刺突文が施され、内外面にはハケ目がある。



第8図 S B 3 測量図

北久米遺跡 2 次調査地



第9図 SB 3 出土遺物実測図（1）

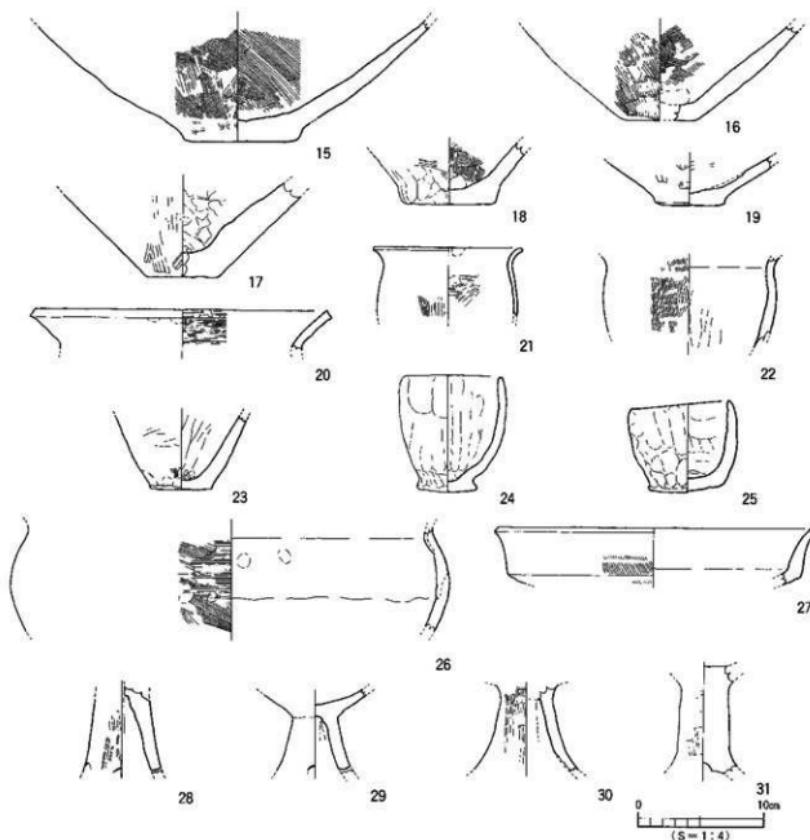
造 構 と 遺 物

15～19は平底の底部である。15・16・18・19は内外面にハケ目がある。17は外面にミガキ、内面はナデである。

鉢形土器（20～26） 20は外反する口縁部に端部は平らな面をなす。21・22は取りの弱い脇部に、21は緩やかに外反する口縁部をもつ。23は平底の底部から外傾して立ち上がり、内外面にハケ目がある。24はくびれの平底で、外面はケズリ後ナデ、内面はナデである。25は不安定な平底で内外面はナデである。26は内湾する脇部に粘土の継ぎ目が残る。

高壺形土器（27～31） 27は外反する壺部で端部は平らな面をなす。28～31は脚部である。28・29は脚柱部に円孔がある。31は直立する脚部上半は中実である。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期中葉とする。



第10図 SB 3出土遺物実測図（2）

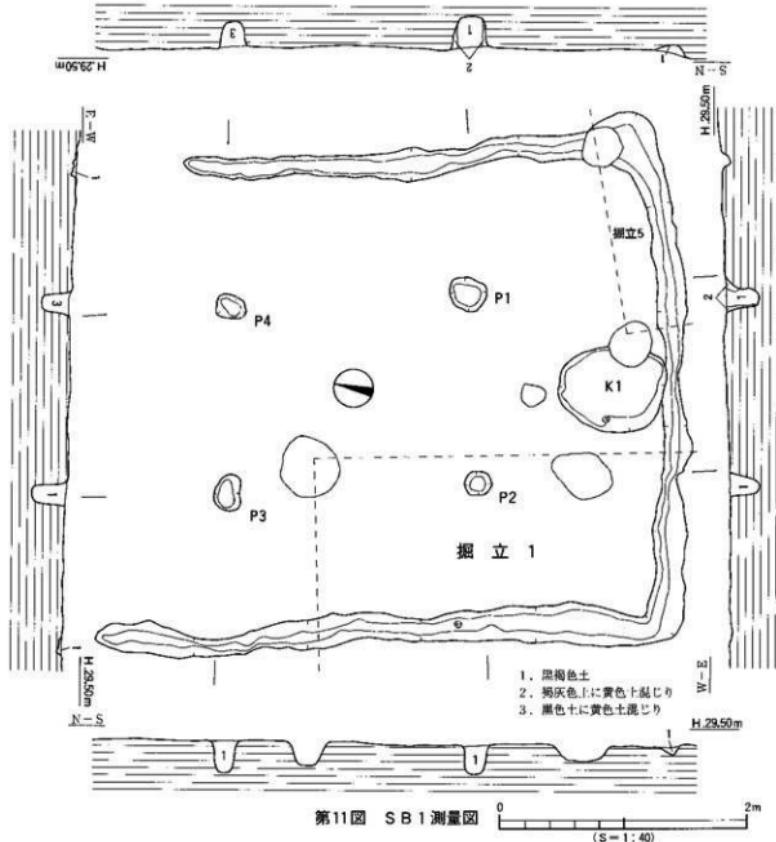
(2) 古墳時代

1) 穴式住居址

S B 1 (第11図)

調査区北側のA 3~4・B 3~4 区に位置し、掘立 5 に切られるが、掘立 1 との切り合いは不明である。後世の削平を受け、壁体はなく、主柱穴・周壁溝だけの検出である。平面形態は方形を呈し、規模は東西4.0m、南北4.5mを測る。住居内施設は主柱穴、周壁溝がある。主柱穴は4本 (P 1~4) を検出し、主柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径20~30cm、深さ24~27cmを測る。周壁溝は幅15~30cm、深さ3~8cmを測る。主柱穴・周壁溝の埋土は黒褐色土と黑色土である。南壁中央部に接する様に、掘り込み (K 1) を確認した。平面形態は楕円形で、断面形態は皿状を呈する。遺物は周壁溝と主柱穴内から、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：出土遺物からの時期特定はできず、埋土が S B 2 ・ 掘立 4 と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



第11図 S B 1測量図

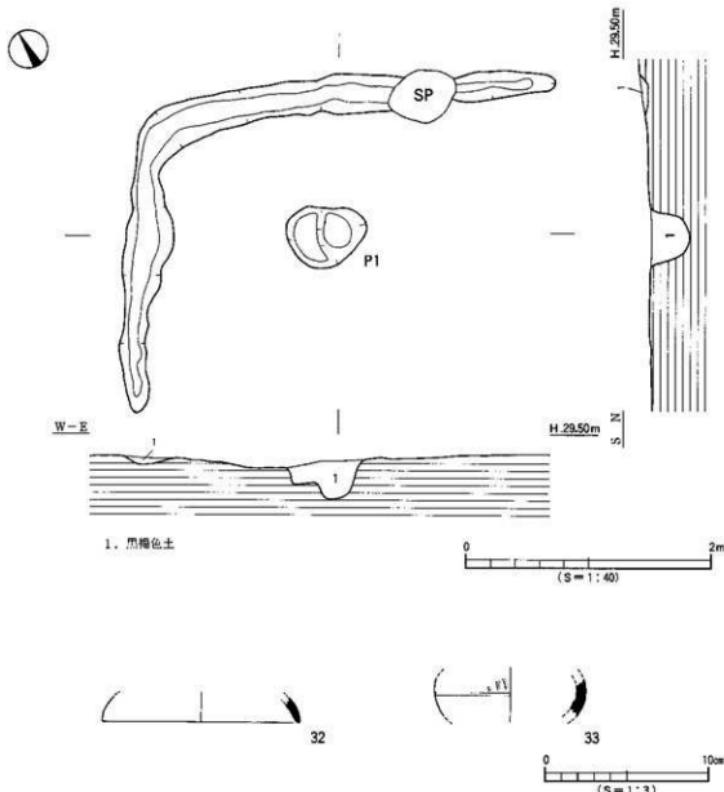
SB 2 (第12図)

調査区南東部のD 2~3・E 2~3区に位置し、北西部のみ検出する。後世の削平を受け、主柱穴と周壁溝を検出する。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西3.2m、南北2.6mを測る。住居内施設には主柱穴(P 1)と周壁溝がある。主柱穴の平面形態は梢円形を呈し、長軸65cm、短軸50cm、深さ30cmを測る。周壁溝は幅20~30cm、深さ3~10cmを測る。主柱穴と周壁溝の埋土は黒褐色土である。遺物は周壁溝と主柱穴内から、須恵器の坏蓋・瓦、土師器の小片が僅かに出土する。

出土遺物 (第12図)

32は坏蓋である。内湾する口縁部の端部は丸くおさまり、内外面に回転ナデがある。33は瓦である。球状の胴部に1条の沈線文が巡り、外面の上胴部にハケ、内外面には回転ナデがある。

時期：出土遺物より古墳時代後期後半とする。



第12図 SB 2測量図・出土遺物実測図

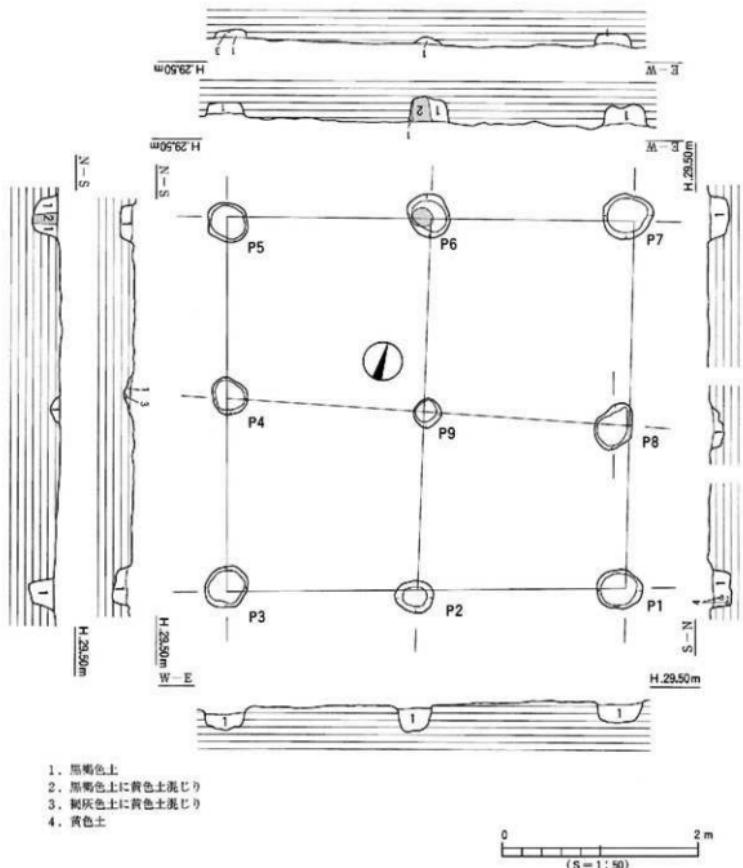
北久米遺跡 2次調査地

2) 挖立柱建物址

掘立1 (第13図)

調査区北側のB 4～5・C 4～5区に位置する。2×2間の縦柱建物で、桁行4.0m、梁行3.9mを測る。東西棟で主軸はN-15°-Wを指向する。柱間は東西2.0m、南北1.8～2.2mを測る。柱穴は円形から橢円形を呈し、直径35～50cm、深さ14～30cmを測る。P 6にて直径20cmの柱痕を検出した。柱穴内の埋土は黒褐色土である。遺物は柱穴内から、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：埋土がSB 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



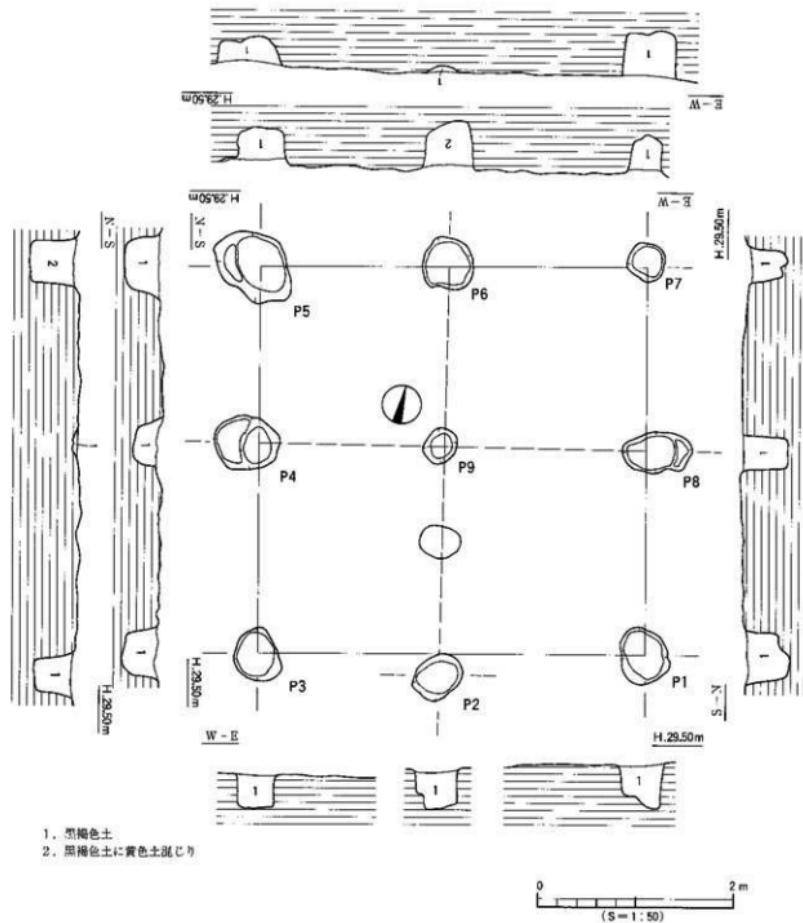
第13図 挖立1測量図

遺構と遺物

掘立2 (第14図)

調査区中央部のC 3～4・D 3～4・E 4区に位置する。2×2間の総柱建物で、桁行4.0m、梁行3.9mを測る。南北棟で主軸はN-15°Wを指向する。平均柱間は東西1.95m、南北2.0mを測る。柱穴は円形～楕円形を呈し、直径40～70cm、深さ26～50cmを測る。柱穴内の埋土は黒褐色土である。遺物は柱穴内から土師器の小片が僅かに出土する。

時期：埋土がS B 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



第14図 掘立2測量図

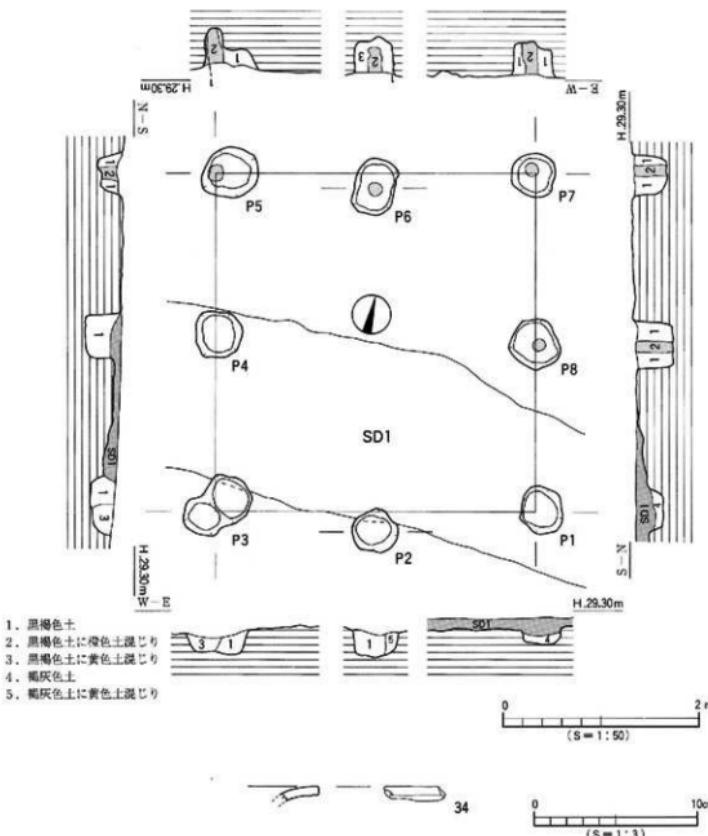
掘立 3 (第15図)

調査区南側のE 3～4・F 3～4 区に位置し、SD 1に切られる。2×2間で、桁行3.46m、梁行3.24mを測る。南北棟で主軸はN-11°-Wを指向する。平均柱間は東西1.73m、南北1.62mを測る。柱穴は円形～楕円形を呈し、直径40～60cm、深さ16～48cmを測る。P 5～P 8にて直径12～18cmの柱痕を検出した。また、P 3は柱穴が2基重複しており、この部分は柱の建て替えの可能性がある。柱穴内の埋土は黒褐色土である。遺物は柱穴内から土師器の小片が僅かに出土する。

出土遺物 (第15図)

34は大きく外反する口縁部の端部は平らな面をなし、横ナデがある。

時期：埋土がSB 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



第15図 掘立3測量図・出土遺物実測図

掘立4(第16図)

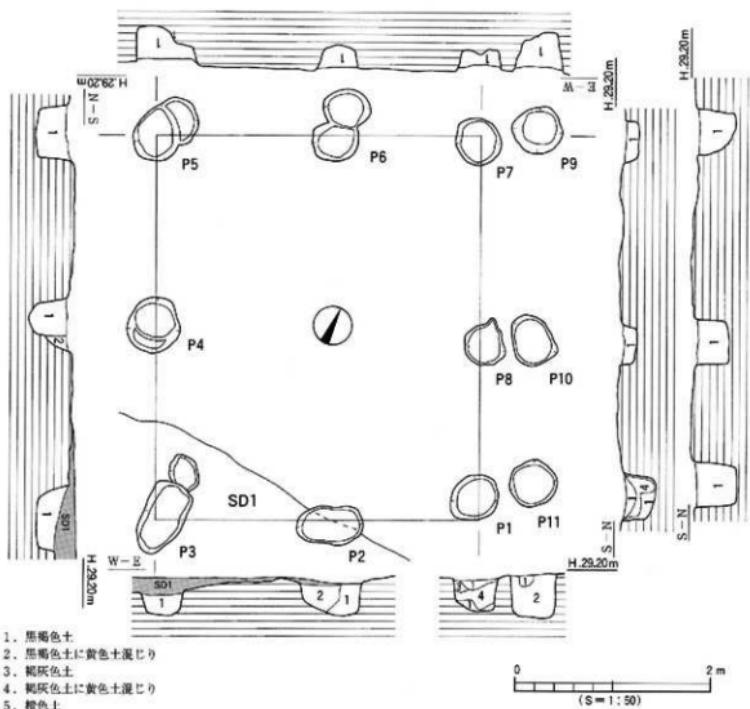
調査区北側のD5・E4～5区に位置し、SD1に切られる。2×2間で、桁行3.9m、梁行3.3mを測る。東西棟で主軸はN-27°Wを指向する。平均柱間は東西1.65m、南北1.95mを測る。柱穴は円形～椭円形を呈し、直径40～50cm、深さ17～50cmを測る。建物址の中央から西側にあるP2～P6は柱穴2基を重複した状態で検出し、P2とP4は切り合いを確認している。また、東側のP1・7・8の東には平行するP9～P11を検出しており、この状況から建物をやや西へ振って建て替えたことが窺える。柱穴内の埋土は黒褐色土である。遺物は柱穴内の床面から浮いた状態で出土した。須恵器の壺・甌・高杯、土師器の高杯・甌の小片がある。

出土遺物(第17図、図版7)

須恵器 35は壺の底部である。平底の底部から外傾して立ち上がり、内外面に回転ナデ・指頭痕がある。36は高杯の蓋のつまみである。大きく凹むつまみには回転ナデがある。

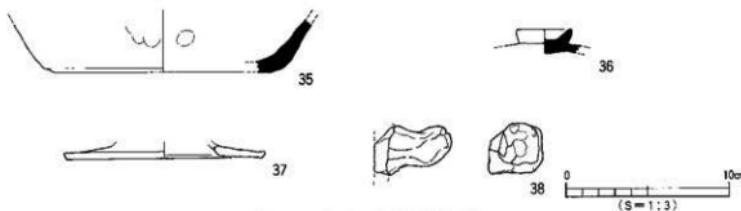
土師器 37は高杯の脚部である。脚裙部は稜をもち外方に広がり、端部に不明瞭な段を有し、横ナデがある。38は甌の把手部で、やや外上方にのびる。

時期：出土遺物より古墳時代中期後半とする。



第16図 掘立4測量図

北久米遺跡2次調査地

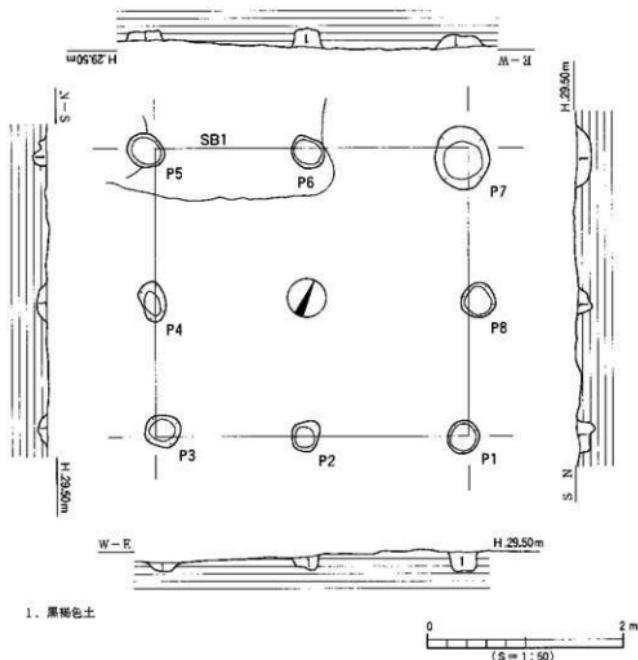


第17図 挖立4出土遺物実測図

撮立5(第18図)

調査区北東部のB 2 ~ 3・C 2 ~ 3区に位置し、SB 1を切る。2×2間で、桁行3.2m、梁行2.96mを測る。東西棟で主軸はN-22°Wを指向する。平均柱間は東西1.6m、南北1.48mを測る。柱穴は円形～楕円形を呈し、直径30~60cm、深さ20~44cmを測る。柱穴内の埋土は黒褐色土である。遺物は柱穴内から土師器の小片が僅かに出土する。

時期：埋土がSB 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。

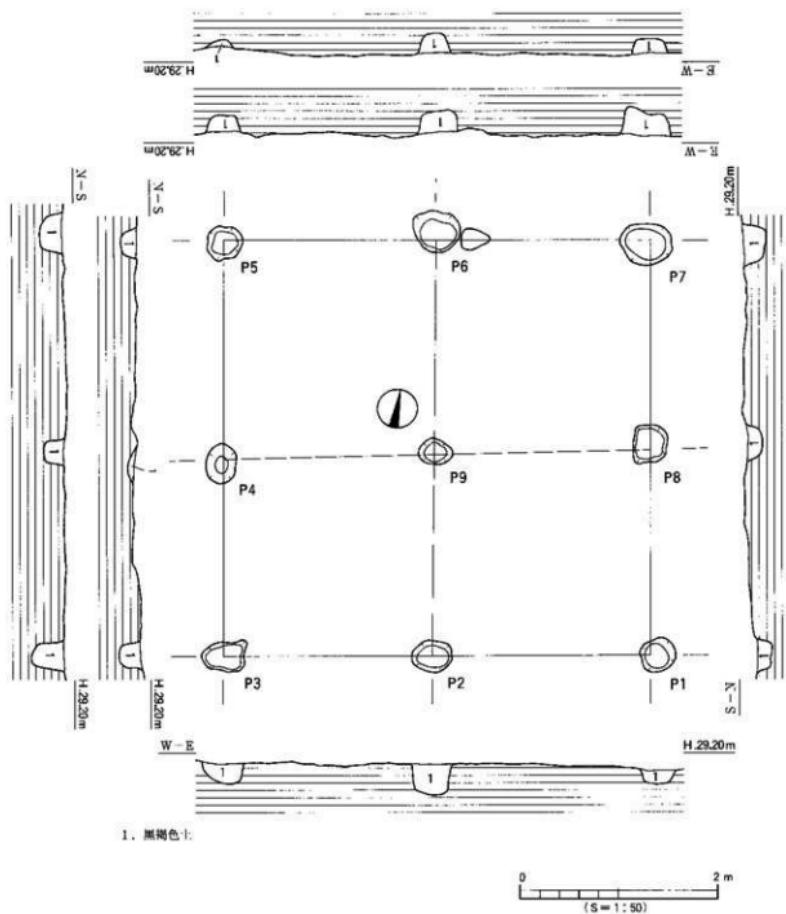


第18図 挖立5測量図

掘立6（第19図）

調査区南西部のD 5～6・E 5～6区に位置する。2×2間の総柱建物で、桁行4.28m、梁行4.24mを測る。南北棟で主軸はN-9°-Wを指向する。平均柱間は東西2.14m、南北2.12mを測る。柱穴は円形～楕円形を呈し、直径25～50cm、深さ15～33cmを測る。柱穴内の埋土は黒褐色土である。遺物は柱穴内から土師器の小片が僅かに出土する。

時期：埋土がS B 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



第19図 掘立6測量図

3) 溝

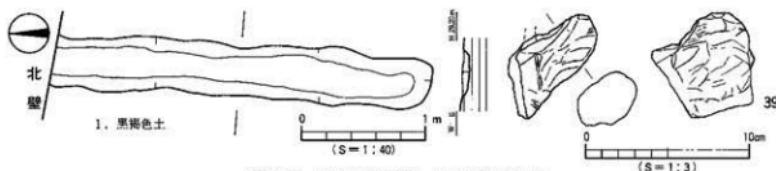
SD 2 (第20図)

調査区北西部のA 6 区に位置し、北端は調査区外にのびる。断面形態は皿状を呈し、検出長3.0m、上場幅0.38~0.48m、深さ6cmを測る。溝床は北から南に5cmの比高差を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の瓶が出土する。

出土遺物 (第20図)

39は瓶の把手である。外上方にのびる。

時期：埋土がSB 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。

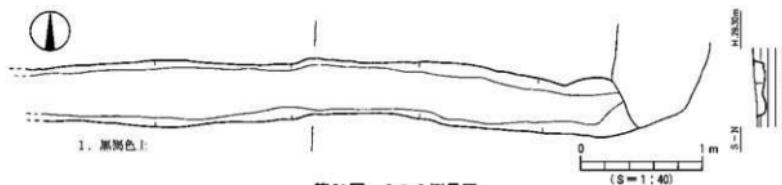


第20図 SD 2 測量図・出土遺物実測図

SD 3 (第21図)

調査区北西部のB 5~6 区に位置し、西端は調査区外にのびる。断面形態は皿状を呈し、検出長4.8m、上場幅0.4~0.55m、深さ12cmを測る。溝床は東から西に17cmの比高差を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は基底面より浮いた状態で、須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：埋土がSB 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



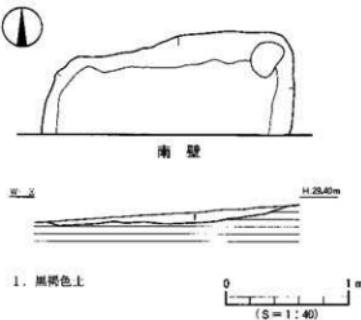
第21図 SD 3 測量図

4) 土坑

SK 1 (第22図)

調査区南東部のF 2 区に位置する。南が調査区外にのびるために全容は不明であるが、平面形態は長方形ないし方形を呈するものと推測する。断面形態は皿状である。規模は東西2m、南北0.85m、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：埋土がSB 2・掘立4と同じことから古墳時代中期後半から後期後半の間とする。



第22図 SK 1 測量図

(3) 中世

1) 溝

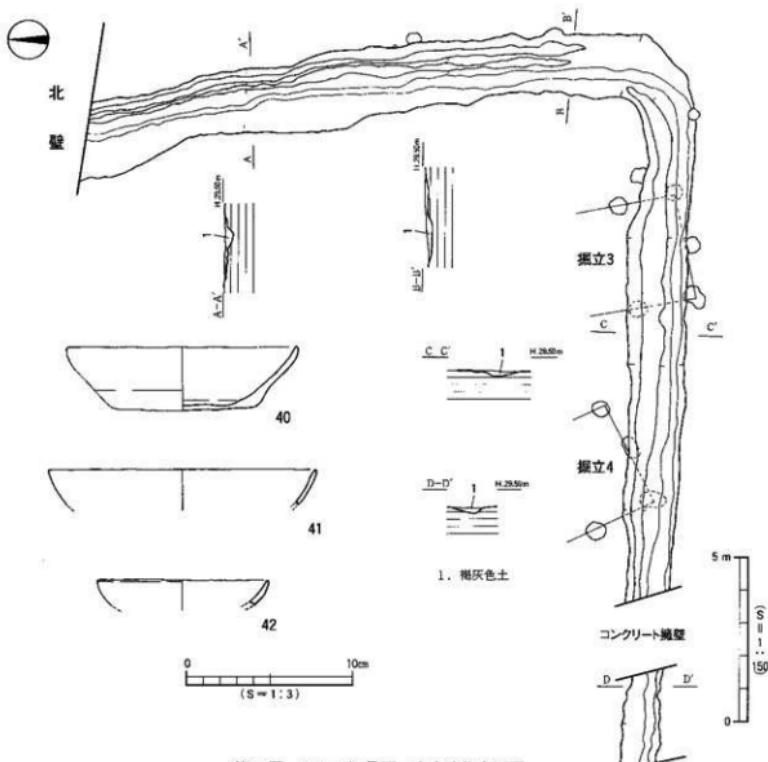
S D I (第23図)

調査区北東部のA 2 ~ 3 区から南北方向に直線的に延び、南東部のE 2 区にて屈曲し、南西部のF 7 区まで直線的に延びており、北・西端は調査区外に延びている。第V層・掘立3・4を切る。規模は検出長37.9m (南北17m・東西20.9m)、上場幅1.3~2.4m、深さ10~22cmを測る。南北方向の溝内の東側に幅40~70cm、断面形態はレンズ状で、深さ6~10cmの小溝を伴っており、南東部の溝が屈曲部手前で消滅している。溝床は北東部から南東部に23cmの比高差を測る。埋土は褐色灰色土の単一層の堆積である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の壺・皿が出土する。

出土遺物 (第23図、図版7)

40・41は土師器の壺である。40は平底の底部から外反して立ち上がり、口縁部付近は内湾する。底部に回転糸切り痕が残る。41は内湾気味の肩部をもつ。42は土師器の皿で、内湾する肩部をもつ。

時期：出土遺物より13世紀代とする。



第23図 SD I 測量図・出土遺物実測図

2) 柱穴

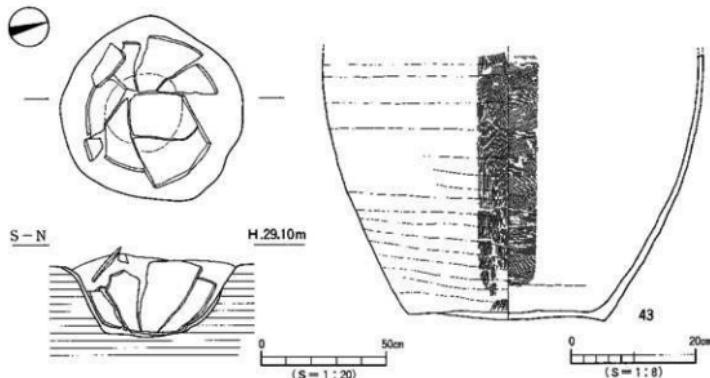
S P 8 (第24図、図版3)

調査区南西部のD 6・E 6区に位置する。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径72cm、深さ33cmを測り、埋土は褐灰色土である。検出面より床面にかけては陶器の壺形土器が据えられた状態で出土した。この壺は、後世の削平により上半部が欠失している。

出土遺物 (第24図、図版7)

43は備前焼の大壺である。やや凹凸のある平底の底部から内湾気味に立ち上がり、内面は横方向のハケ目、外面は縦方向のハケ目がある。外面にて粘土粙の積み上げ痕がみられ、上胴部は2~4cm、下胴部は1.5~2cmの幅である。

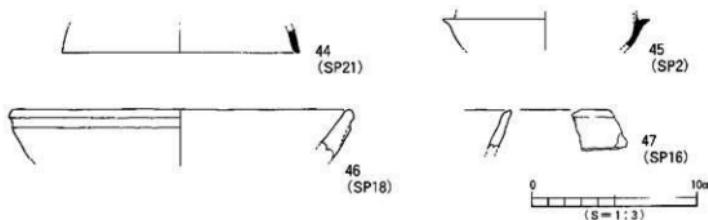
時期：出土遺物より上限を15世紀代とする。



第24図 S P 8 測量図・出土遺物実測図

(4) 柱穴出土遺物 (第25図)

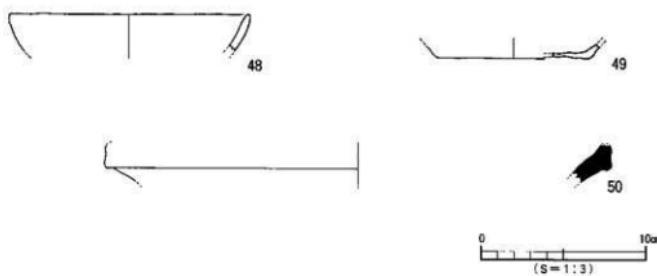
44はS P 21出土の須恵器の壺蓋である。口縁端部は丸くおさまる。45はS P 2出土の須恵器の壺身である。受部端部には凹みをもつ。46はS P 18出土の土師器の鉢である。外傾する口縁部の外面に凹みをもち、内外面にはナデがある。47はS P 16出土の壺である。外傾する口縁部の端部は尖り気味である。



第25図 柱穴出土遺物実測図

(5) 第IV層出土遺物 (第26図)

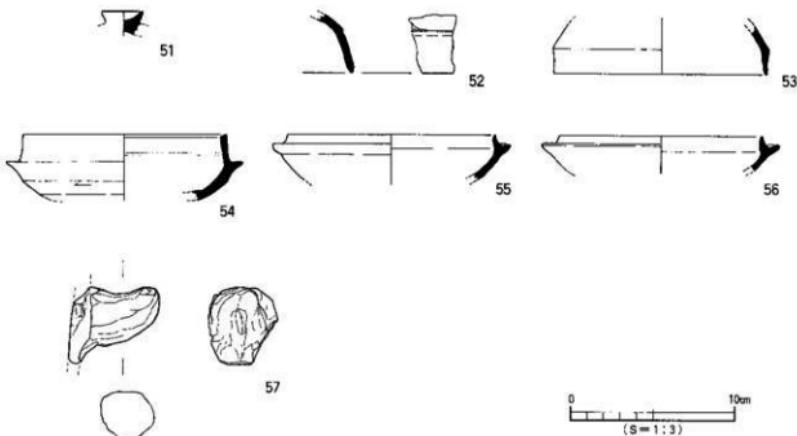
48・49は土師器の坏である。48は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。49は平底の底部に回転糸切り痕が残る。50は束縛系のこね鉢の口縁部である。外反する口縁部に端部は上下方に肥厚され、回転ナデがある。



第26図 第IV層出土遺物実測図

(6) 第V層出土遺物 (第27図、図版7)

51は有蓋高坏のつまみで、中央部が凹む。52・53は坏蓋である。52は天井部と口縁部の境に明瞭な稜をもち、53は不明瞭な稜である。54～56は坏身である。54は上方にのびる口縁部の端部は内傾する段を有する。55・56の受部は外上方にのび、内傾する短い口縁部をもち、内外面には回転ナデがある。57は瓶の把手で、外上方にのびる。



第27図 第V層出土遺物実測図

4. 小 結

今回の調査では、弥生時代・古墳時代・中世の遺構や遺物を確認することができた。

弥生時代の遺構はS B 3に限られる。

S B 3は小型の竪穴遺構で、東西に長い形状から倉庫的な施設と考えられる。北側の福音小学校構内遺跡では、本遺跡より1m程高い微高地上に竪穴式住居址を数棟検出している。S B 3は、これらの居住域がさらに南西部へ広がることを示す貴重な資料になる。

古墳時代には、S B 1・2、掘立1～6がある。竪穴式住居址は後世の削平により、主柱穴や周壁溝以外の屋内施設は未検出になった。ただし、S B 1の南側壁面では、壁に接する様に楕円形の浅い掘り込みを検出している。この掘り込みは、検出位置と形状より、窓施設の可能性をもつ。

S B 1とS B 2は切り合いから掘立1～3に先行する時期のものであるが、時期決定しうる遺物が乏しく、詳しい時期は特定できない。掘立1～掘立3の3棟は南北に並んで建てられ、掘立6はこれらの西側に平行してあるため、4棟は同時期の存在と考えられる。掘立4は柱穴を重複した状態で検出しており、建物をやや西へ振って建て替えていることが窺える。掘立柱建物の規模は全て2×2間であり、その規模は8～16m²になる。この中でも15～16m²の比較的大きい掘立柱建物3棟（掘立1・2・6）は全て総柱の建物構造をもつことになる。

中世には、溝と小穴がある。溝S D 1は南北方向から東西方向にはば直角に屈曲する溝であり、北に延びる軸方向は福音小学校構内遺跡の2区西側で検出した溝につながるものと思われる。そして当遺構は区画溝の南東隅部と考えられ、区画溝の南北方向の検出長は約80mの規模となる。小穴ではS P 8が注目される。S P 8から出土した備前焼きの大甕は、下半部のみの残存で、甕の出土状態から埋甕として地中に埋められていたと考えられる。また、S P 8の南隣に接するようにS P 7が、東側にもS P 5とS P 6が並んで検出されている。これ等はS P 8と同様の掘り込みであり、埋甕として使われていたと推測する。これらの遺構の検出から、当地に13～15世紀代の集落の存在が窺える。

【参考文献】

- 橋木雄一編 1994「北久米浮蓮寺遺跡－3次調査地－」『松山市埋蔵文化財調査報告書42』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・武正良浩編 1995「福音小学校構内遺跡－弥生時代編－」『松山市埋蔵文化財調査報告書50』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一編 1996「福音寺地区の遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告書52』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知編 1998「福音寺地区の遺跡II」『松山市埋蔵文化財調査報告書67』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 加島次郎編 1999「乃万の裏遺跡－2次調査地－」『松山市埋蔵文化財調査報告書72』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構一覧

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記。

例) 拡→拡張部、口→口縁部、頸→頸部、胴上→胴部上位、

胴中→胴部中位、胴下→胴部下位、底→底部、脚→脚部

胎土・焼成欄: 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 長→長石、石→石英、密→精製土

() 内数値は混和剤粒子の大きさを示す。(単位: mm)

焼成欄の略記について。○→良好、○→良、△→不良。

表2 穴式住居址一覧

壁穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 (m)		埋 土	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内 部 施 設			周壁溝	備 考
			長さ(長径) × 幅(短径)	× 深さ				高床	土坑	炉	カマド	
1	古墳中期後半～後期後半	方形	4.5 × 4.0 × 0.24～0.27		黒褐色土 黒色土	20.3	4				○	床面での検出
2	古墳後期後半	方形	3.2 × 2.6 × 0.3		黒褐色土	9.4	1以上				○	SD 1に切られる
3	弥生後期中晩	方形	3.2 × 2.4 × 0.1		黒褐色土	7.3	1以上				○	

表3 挖立柱建物址一覧

掘立	規 模 (間)	方 向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2 × 2	東西	4.0	2.0	3.9	1.8～2.2	N-15°-W	15.2	古墳中期後半～後期後半	SB 1を切る柱建物
2	2 × 2	南北	4.0	2.0	3.9	1.95	N-15°-W	15.6	古墳中期後半～後期後半	柱建物
3	2 × 2	南北	3.46	1.73	3.24	1.62	N-11°-W	10.5	古墳中期後半～後期後半	SD 1に切られる
4	2 × 2	東西	3.9	1.95	3.3	1.65	N-27°-W	15.6	古墳中期後半	SD 1に切られる
5	2 × 2	東西	3.2	1.6	2.96	1.48	N-22°-W	8.7	古墳中期後半～後期後半	SB 1を切る
6	2 × 2	南北	4.28	2.14	4.24	2.12	N-9°-W	16.8	古墳中期後半～後期後半	柱建物

表4 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m)		方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考	(1)
			長さ × 幅 × 深さ							
1	A・2～3	レンズ状	37.9 × 1.3～2.4 × 0.1～0.22		東西から南北	褐灰色土	土師	13C代	SB2-掘立3-4を切り、調査区外へ延びる	
2	A・6	皿 状	3.0 × 0.38～0.48 × 0.06		南北	褐褐色土	土師	古墳中期後半～後期後半	調査区外へ延びる	

北久米遺跡 2次調査地

溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
3	B・5~6	皿 状	4.8×0.4~0.55×0.12	東西	黒褐色土	須恵	古墳中期後半~後期後半	調査区外へ延びる

表5 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	F・2	方 形	皿 状	2.0×0.85×0.07	1.4	黒褐色土	土師	古墳中期後半~後期後半	調査区外へ延びる

表6 S B 3出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 務・施 文	調 整		(外)面	(内)面	色 横	胎 土	燒 成	備考	回版
				外 面	内 面							
1	壺	口径(15.6) 残高 10.3	緩やかな「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。	①ハケヨコナデ (8~10本/cm)	②ヨコナデ (5~6本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○					
2	壺	口径(20.2) 残高 4.9	緩やかな「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	②ヨコナデ (5~6本/cm)	褐色 褐色	石・長(1~5) ○					
3	壺	口径(16.0) 残高 2.7	緩やかに外反する口縁部に端部はやや外方に肥厚され平らな面をなす。	ハケ(9本/cm)	ハケ(9本/cm)	にぶい橙色 橙色	石・長(1) ○					
4	壺	残高 5.7 底径(4.8)	やや上部底の底部付近にくびれをもつ。	指頭痕	指頭痕	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1) ○					
5	壺	残高 6.5 底径(5.7)	底底の底部付近はややくびれる。	ヘラケズリ	指頭痕	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~5) ○					
6	壺	残高 7.8 底径(4.6)	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ (6~8本/cm) ヨコナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ○					
7	壺	残高 5.2 底径(6.0)	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ (8~10本/cm)	ハケ(3本/cm)	にぶい橙色 黒色	石・長(1~5) ○					
8	壺	口径 18.4 残高 32.0	端部に斬面三角形の凸帯をもち底盤部は内傾し、端部に不明瞭な段を有する。	ハケ (2~5本/cm)	ハケ (3~5本/cm)	褐色 褐色	石・長(1~4) ○				6	
9	壺	口径(16.7) 残高 7.7	外反する口縁部に、内傾する底盤部をもち、端部は平らな面をなす。	⑥ハケ (6~7本/cm) ⑦ハケ (7~9本/cm)	多指頭痕 (7本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○					
10	壺	口径(29.5) 残高 1.9	大きく述べる口縁部の端面に4条の沈線文が施される。	①ヨコナデ ②ヨコナデ	①ヨコナデ ②ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~3) ○				6	
11	壺	口径(23.5) 残高 2.4	大きく述べる口縁部の端面に3条の沈線と円形容文がつく。	⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石(1~3) ○				6	
12	壺	口径(20.2) 残高 7.6	大きく外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	ハケ (5~8本/cm)	ハケ (4~5本/cm)	褐色 褐色	石(1~2) ○					
13	壺	口径(16.4) 残高 8.1	やや外傾する口縁部に端部付近は外反する。	ハケ(8本/cm) →ヨコナデ	ハケ(7本/cm) →ヨコナデ	褐色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○					

出土遺物観察表

SB3 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
14	壺	直徑(14.7) 残高 28.0	直立気味の底部に、3~6条の沈線文が通り、崩壠との境に凸帯が通り、その上下に荆文が施される。	ハケ (8本/cm) 底ハケ (9~10本/cm)	ナダ (7~9本/cm) 底ナダ (7~10本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい橙色	石・長(1~4) ○			6
15	壺	残高 10.2 底径 9.2	平底の底部はやや肥厚する。	ハケ (7~12本/cm)	ハケ (7~9本/cm)	明赤褐色 黒色	石・長(1~4) ○			6
16	壺	残高 7.8 底径 (5.5)	平底の底部から内湾気味に立ち上る。	ハケ(7~9本/cm) →ナダ	ハケ(9本/cm) →ナダ	黒褐色 黒褐色	石・長(1) ○			
17	壺	残高 7.8 底径 (5.4)	平底の底部から外傾して立ち上がる。	ミガキ	ナダ	にぶい褐色 暗灰色	石(1~4) ○			
18	壺	残高 5.1 底径 (7.0)	平底の底部からややくびれをもち外傾して立ち上がる。	ハケ ナダ	ハケ(8本/cm)	明赤褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○			
19	壺	残高 4.0 底径 (5.6)	平底の底部からややくびれをもち外傾して立ち上がる。	ハケ+ヨコナダ	ハケ+ヨコナダ	橙色 にぶい褐色	石・長(1~3) ○			
20	鉢	口径(23.0) 残高 3.3	外反する口縁部に端部は平らな圓をなす。	ヨコナダ	ハケ(10本/cm)	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1) ○			
21	鉢	口径(10.5) 残高 5.7	張りの弱い側部から口縁部は外反する。	ハケ (6本/cm)	ハケ(6本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長(1) △			
22	鉢	口径(23.6) 残高 7.3	張りの弱い側部。	ハケ(9本/cm)	ナダ	黒褐色 黒褐色	石・長(1~4) ○			
23	鉢	残高 6.2 底径 (4.9)	平底の底部から外傾して立ち上がる。	ハケ 指彫痕	ハケ ナダ	橙色 帶色	石・長(1~3) ○			
24	鉢	口径(7.6) 器高 9.7 底径 4.4	不安定な平底の底部付近はくびれをも内済して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	ケズリ→ナダ @指彫痕	ナダ @指彫痕	褐色 褐色	石・長(1~3) ○			6
25	鉢	口径(7.8) 器高 7.7 底径 5.3	不安定な平底の底部から内済して立ち上がり口縁端部は尖り氣味である。	ナダ	ナダ	橙色 黄灰色	石 ○			6
26	鉢	口径(34.8) 残高 8.6	内済する側部に粘土の巻き目が残る。	ハケ (8~10本/cm)	指彫痕	明赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) ○			
27	高杯	口径(21.8) 残高 4.7	外反気味の杯部の端部は平らな圓をなす。	ヨコナダ ハケ(6本/cm)	マメフ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~2) ○			
28	高杯	残高 6.4	脚部に円孔が穿けられる。	ミガキ	シボリ痕	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○			
29	高杯	残高 6.8	脚部に円孔が穿けられる。	マツツ	シボリ痕	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~2) ○			
30	高杯	残高 6.9	外反して下がる脚部。	ハケ (6本/cm)	シボリ痕	明褐色 褐灰色	石・長(1~3) ○			

北久米遺跡 2次調査地

表7 SB3出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
31	高坏	残高 8.4	直立する脚上半は中実である。	※ハケ	※ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	右・長(1) ○	-	-	-

表7 SB2出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
32	坪蓋	口径(12.0) 残高 1.5	内凹する口縁部の端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 暗灰色	右	○	-	-
33	窓	重大刷(9.2) 残高 2.3	球状の胴部に1条の沈線文が述る。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	左	○	-	-

表8 捜立3出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
34	窓	残高 0.9	大きく外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	①ヨコナデ ②ヨコナデ	①ヨコナデ ②ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石(1) ○	-	-	-

表8 捜立4出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
35	窓	残高 3.2 底径(14.4)	平底の底部から外反して立ち上がる。	回転ナデ 指頭度	回転ナデ 指頭度	褐灰色 灰色	石(1~4) ○	-	-	7
36	右蓋 左蓋	つまみ径 3.1 つまみ高 0.9 残高 1.9	つまみは大きく凹む。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	左 ○	-	-	7
37	高坏	残高 0.8 底径(11.8)	脚部は棲をもち外方に広がり、端部に不明瞭な段を有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	右 ○	-	-	7
38	瓶	把手長 4.7 残高 3.0	やや外上方にのびる把手部である。	マツフ	-	明黄褐色 明黄褐色	左 ○	-	-	7

表10 SD2出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
39	瓶	残高 6.2	外上方にのびる把手部である。	ナア	-	乳白色 乳白色	石(1~4) ○	-	-	-

表11 SD1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
40	坏	口径(13.6) 3.9 底径 8.2	平底の底部から外反して立ち上がり、底部に回転糸切り痕が残る。	マツフ	※回転ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~2) ○	-	-	7

出土遺物観察表

SD1 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		(外面) 色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
41	坏	口径(15.8) 残高 2.2	内湾気味の胴部である。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色		密 ○		
42	皿	口径(10.0) 残高 1.5	内湾する胴部から口縁部である。	マメツ	マメツ	乳白色 乳橙色		密 ○		

表12 SP8 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		(外面) 色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
43	甕	残高 43.5 底径 32.2	やや凹凸のある半底の底部から内 湾気味に立ち上がる。	ハケ(5本/cm)	ハケ (4~5本/cm)	暗赤褐色 赤黄褐色	石・長(1) ○			7

表13 柱穴出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		(外面) 色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
44	坏蓋	口径(14.0) 残高 1.5	山縁部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色		密 ○	SP21	
45	坏身	受部径(12.4) 残高 2.0	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○		SP2	
46	鉢	口径(20.0) 残高 3.0	外模する口縁部の外側に凹みが進 る。	ヨコナデ (ヨコナデ)	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○		SP18	
47	甕	残高 2.4	外模する口縁部の底部はやや外方 に肥厚される。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 明褐色	石・長(1) ○		SP16	

表14 第IV層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		(外面) 色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
48	坏	口径(14.2) 残高 2.2	内湾して立ち上がり口縁部は丸く おさまる。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色		密 ○		
49	坏	残高 1.9 底径(9.0)	平底の底部に回転糸切り痕が残る。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ○			
50	こね鉢	口径(30.0) 残高 2.2	外反する口縁部に窪部は上方にの びる。束縛系。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○			

表15 第V層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		(外面) 色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
51	有蓋 高环	つまみ径 2.5 残高 1.4	つまみの中央部が凹む。	回転ナデ	ナデ	青灰色 灰色		密 ○		7

北久米遺跡 2次調査地

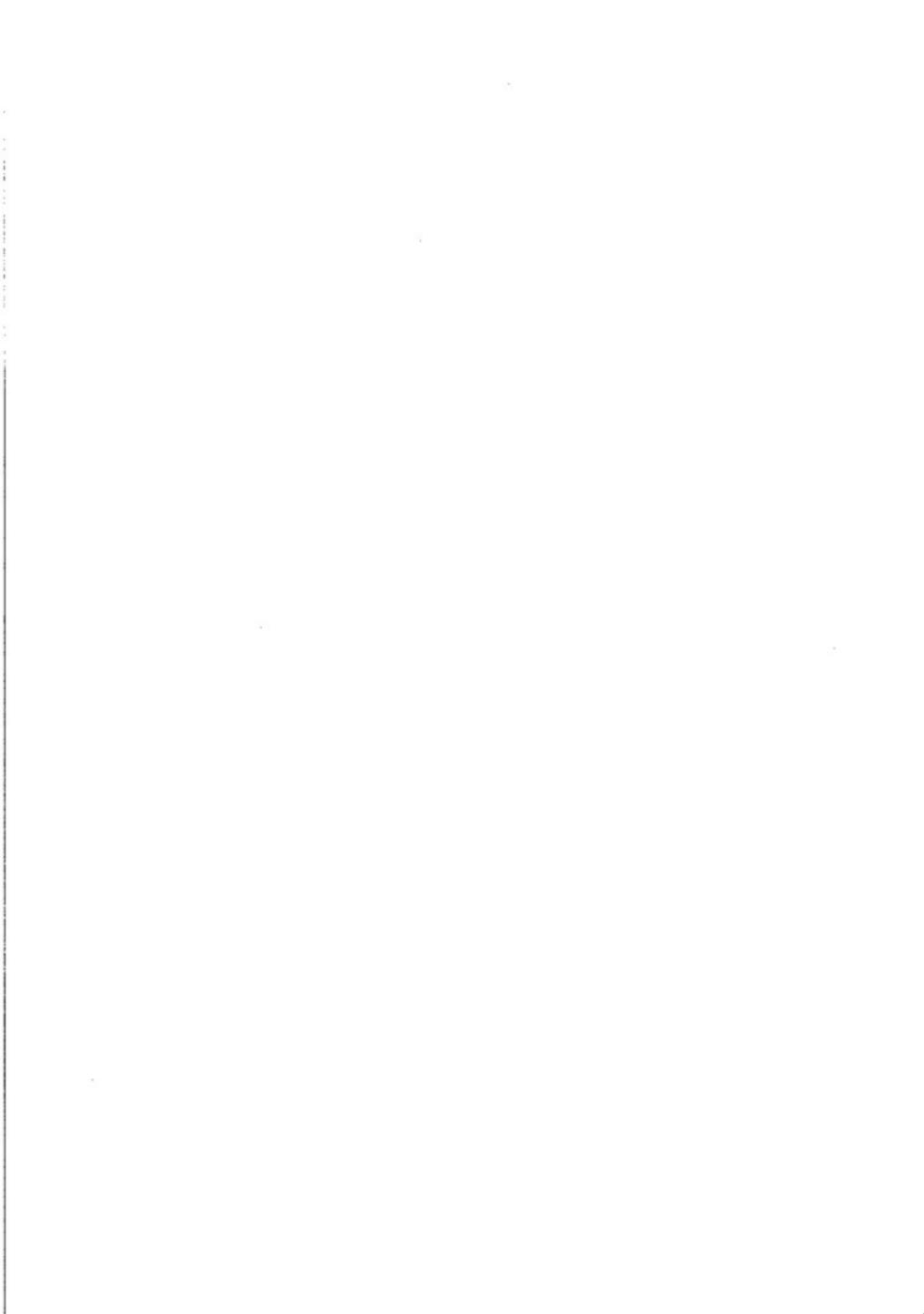
第V層出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		要 色 調 (外面) (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
52	壺蓋	残高 3.6	天井部と口縁部の境に棱をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○	密		7
53	壺蓋	口径 (12.7) 残高 3.0	天井部と口縁部の境に不明瞭な棱をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	密		7
54	壺身	口径 (12.0) 残高 4.0	受部は外方にのび口縁部は上方に のび沿部は内側する段を有する。	回転ナデ ※回転ヘラケズ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	密		7
55	壺身	口径 (12.4) 残高 3.8	受部は外上方にのび口縁部は内反し、 端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○	密		7
56	壺身	口径 (12.2) 残高 2.1	受部は外上方にのび口縁部は内反し、 端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	密		7
57	瓶	残高 4.7	外上方にのびる把手部である。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい褐色	長(1~2) ○	長(1~2) ○		7

第3章

南久米町遺跡 4次調査地



第3章 南久米町遺跡4次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

2001(平成13)年5月8日、藤井光子氏より、松山市南久米町420番地1、422番地における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.126高畠遺物包含地』内にあり、周知の遺跡として知られている。南西には、弥生時代から中世までの集落関連遺構を主体とした久米才歩行遺跡の1次~7次調査地がある。また、申請地の東約100mには南久米町遺跡2・3次調査地があり、古代から中世にかけての溝・土坑などが検出されている。そして、南隣の南久米町遺跡では、規則性をもつ掘立柱建物群から巒書土器「時」が出土したことから、来住台地に広がる古代官衙の中心が彌越川の北岸地域に移動すると考えられている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、2001(平成13)年2月8日に文化財課は試掘調査を実施した。その結果、地表面下15~43cmに土坑・柱穴・性格不明遺構を検出し、土師器や須恵器片が出土した。

試掘調査の結果を受け、当該地における遺跡の取り扱いについて文化財課の指導のもと、財團法人松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)と申請者は協議を行い、開発工事によって失われる遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、調査地及び周辺地域における古代から中世までの集落の広がりや、集落構造の解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者の協力のもと2001(平成13)年9月17日から開始した。

なお、調査区は国土座標に沿って4m四方のグリッドを設定し、西から東にA・B・C、南から北へ1・2・3……と設定した。

(2) 調査の経緯

2001(平成13)年9月17日、調査区南側より、重機にて遺構検出面である第V層上面までの掘削と、並行して遺構検出作業を開始する。9月18日、重機による掘削が終了する。9月19日、遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構の振り下げ・測量を開始する。9月21日、グリッド杭を設置する。9月27日、北東部の拡張を人力にて開始する。10月2日、拡張部の掘削を終了し、遺構検出作業を行う。10月11日、遺構の完掘作業を終了する。10月12日、遺構完掘状況の写真撮影を行う。10月15日、遺構の測量が終了する。10月16日、発掘機材の撤出、調査事務所を撤去し、屋外調査を完了する。

(3) 調査組織

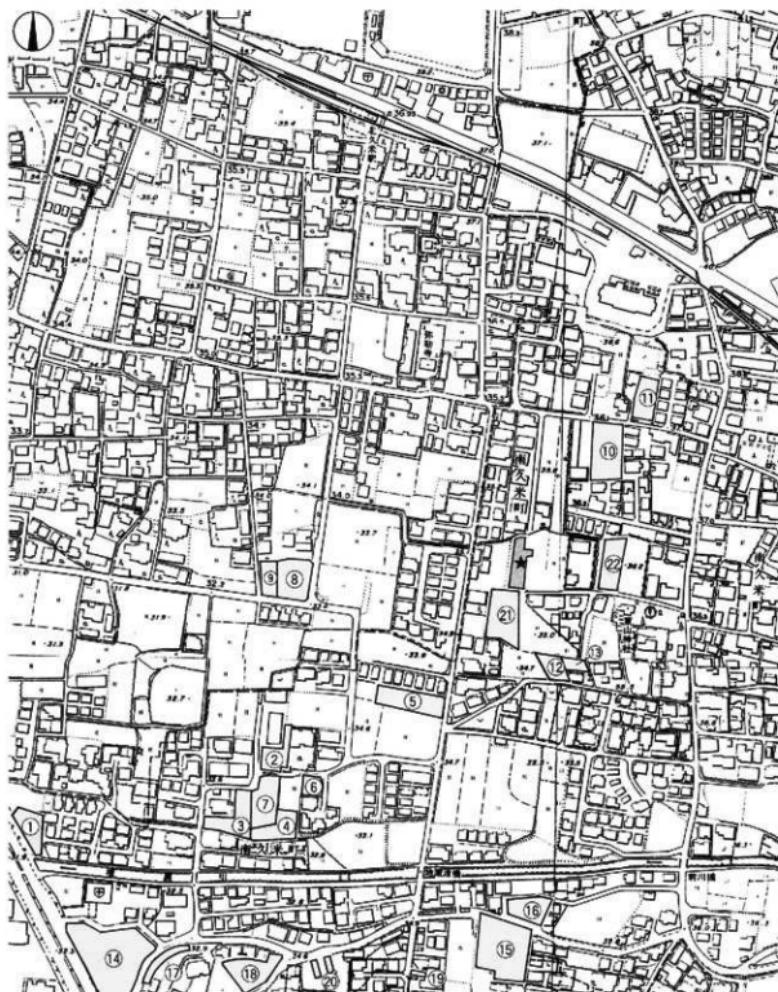
調査地 松山市南久米町420番地1、422番地

調査面積 590.37m²のうち244.14m²

調査期間 平成13年9月17日~同年10月16日

調査担当 河野史知・加島次郎

南久米町遺跡 4次調査地



- | | | | |
|---------------|---------------|--------------|--------------|
| ①久米才歩行遺跡 | ②久米才歩行遺跡 2 次 | ③久米才歩行遺跡 3 次 | ④久米才歩行遺跡 4 次 |
| ⑤久米才歩行遺跡 5 次 | ⑥久米才歩行遺跡 6 次 | ⑦久米才歩行遺跡 7 次 | ⑧北久米町屋敷遺跡 |
| ⑨北久米町屋敷遺跡 2 次 | ⑩南久米北野遺跡 | ⑪南久米北野遺跡 2 次 | ⑫南久米沖台 A 遺跡 |
| ⑬南久米沖台 B 遺跡 | ⑭南久米片廻り遺跡 | ⑮久米高烟遺跡 | ⑯久米高煙遺跡 2 次 |
| ⑰久米高煙遺跡 7 次 | ⑲久米高煙遺跡 10 次 | ⑯久米高煙遺跡 38 次 | ⑰久米高煙遺跡 39 次 |
| ⑳南久米町遺跡 | ㉑南久米町遺跡 2・3 次 | ㉒★南久米町遺跡 4 次 | |

第28図 周辺の遺跡分布図 (S = 1 : 4,000)

調査の経過



第29図 調査地位置図

2. 層位 (第31・32図)

調査地は、松山平野南西部に位置し、重信川中流右岸の小野扇状地と石手川扇状地との間に形成された洪積台地上の標高約34mに立地し、調査以前は畠地であった。基本層序は第Ⅰ層灰色土、第Ⅱ層橙色土～褐色土、第Ⅲ層褐灰色土、第Ⅳ層黒色土、第Ⅴ層明黄褐色土である。調査地の旧地形は、東から西へ緩やかに傾斜しており、調査区の中央部南寄りを北東方向から南西方向にかけて、自然の深い凹みをもつ。

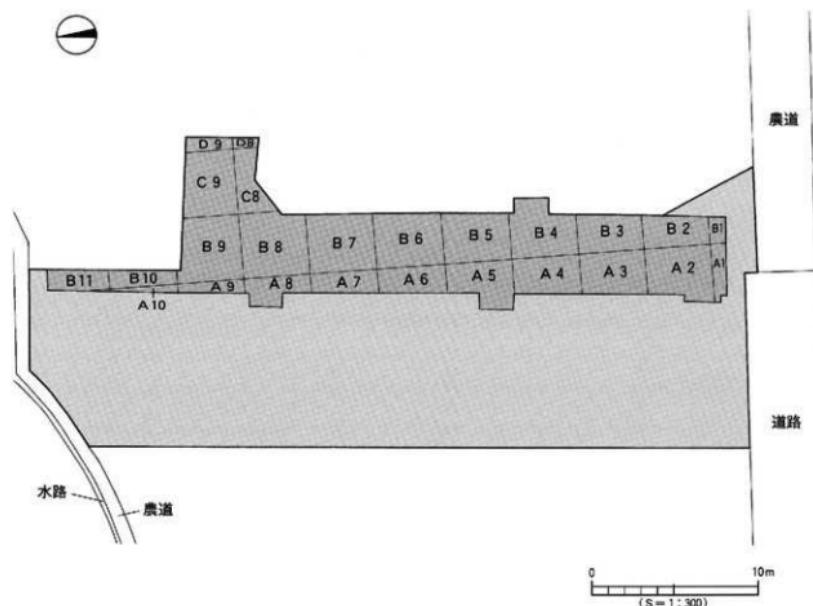
第Ⅰ層 近現代の農耕に伴う客土で、厚さ10～18cmを測る。

第Ⅱ層 農耕に伴う床土で、ほぼ全域に厚さ2～8cmの堆積を測る。

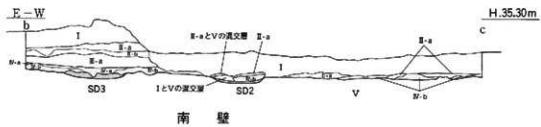
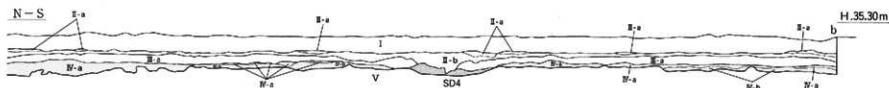
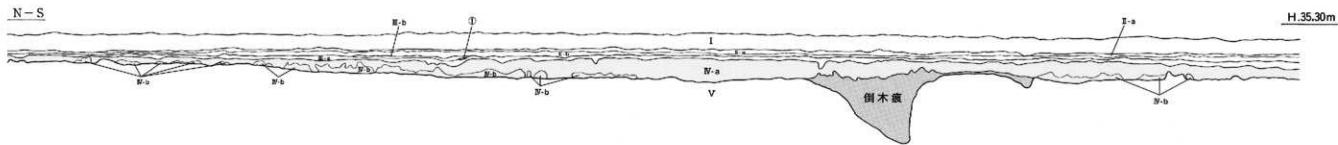
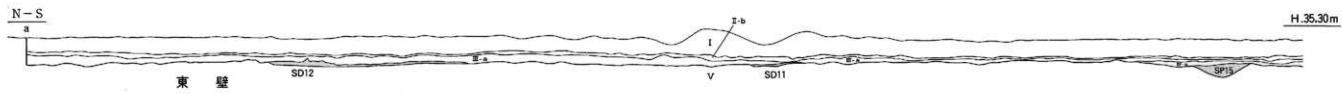
第Ⅲ層 調査区の東部から南西部にかけて堆積し、土師器・須恵器片を包含する。厚さ10～16cmを測る。

第Ⅳ層 調査区の中央部南寄りを北東から南西方向の自然の凹みに堆積し、粘質が強い。最大の厚さ24cmを測る。本層にはアカホヤ火山灰が含まれていた(二次堆積)。

第Ⅴ層 地山であり、調査区中央部から北側にかけて粘土層となる。この層の上面において遺構を検出した。



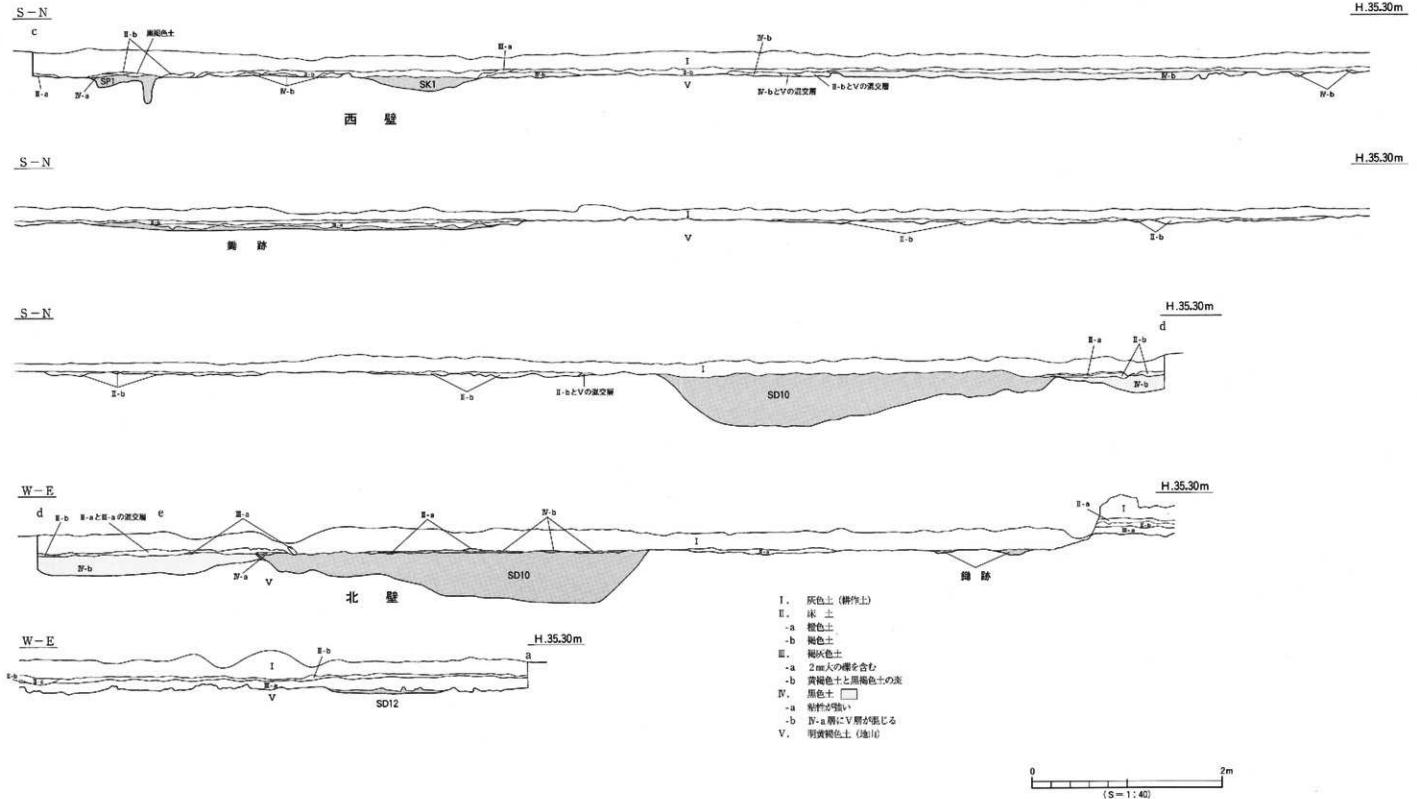
第30図 調査地区割図



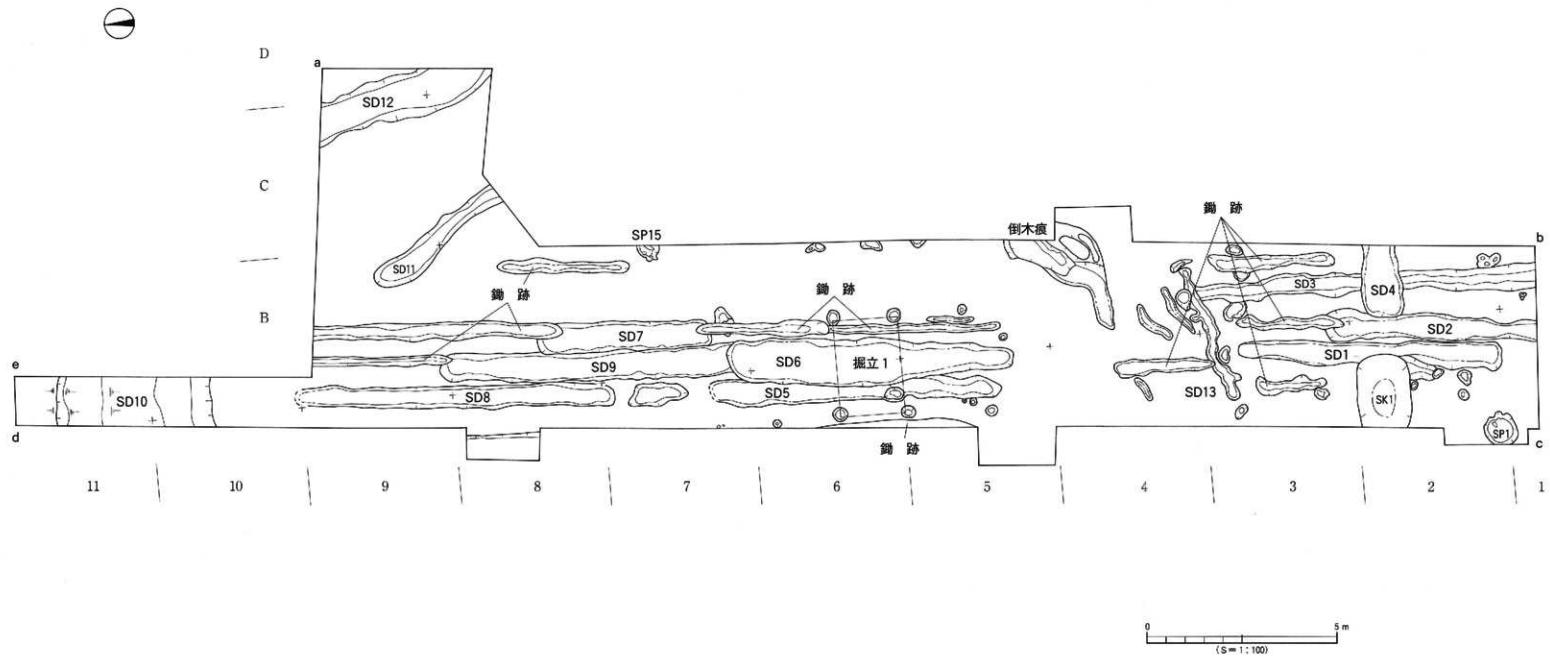
- I. 灰色土 (耕作土)
- II. 黒土
 - a. 鮎色土
 - b. 深色土
- III. 褐灰色土
 - a. 2mm以上の礫を含む
 - b. 黄褐色土と黒褐色土の斑
- IV. 黑色土 (アカホヤ混入土)
 - a. 粘性が強い
 - b. IV-a層にV層が混じる
- V. 明黄褐色土 (油山)
 - a. IV-a層類似土壤
- ① IV-a層類似土壤



第31図 東・南壁土層図



第32図 西・北壁土層図



第33図 造構配置図

3. 遺構と遺物

今回の調査では、古代～近世の遺構や遺物を検出した。遺構は、第V層上面から獨立柱建物址1棟、溝13条、土坑1基、柱穴20基、倒木痕1基、跡跡10条を検出した。遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦片・石器・鐵器がある。

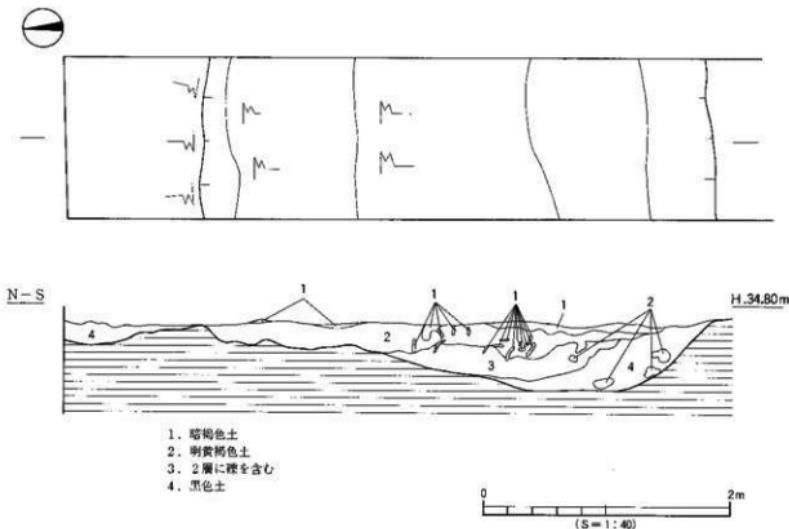
(1) 古代

1) 溝

S D 10 (第34図、図版10・12)

調査区北端のA 10～B 11区に位置し、東西端は調査区外に延びる。軸は東西方向を指向し、規模は検出長1.3m、上場幅4.1m、深さ57cmを測る。断面形態は、南肩が急傾斜をもち、北肩は中段をもち立ち上がり、さらに上場から北へ向けて傾斜を示す。埋土は南肩の上場から基底面にかけ黒色土が堆積しており、その黒色土を切る様に上層から基底面にかけて、断面形態がレンズ状に明黄褐色土の地山土が埋まる。遺物は明黄褐色土の上部から土師器片、黒色土中から土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土や遺構の形状が南久米町遺跡2次調査S D 1と同じことから、古代前葉の造営とする。



第34図 S D 10測量図

南久米町遺跡 4 次調査地

S D 3 (第35図)

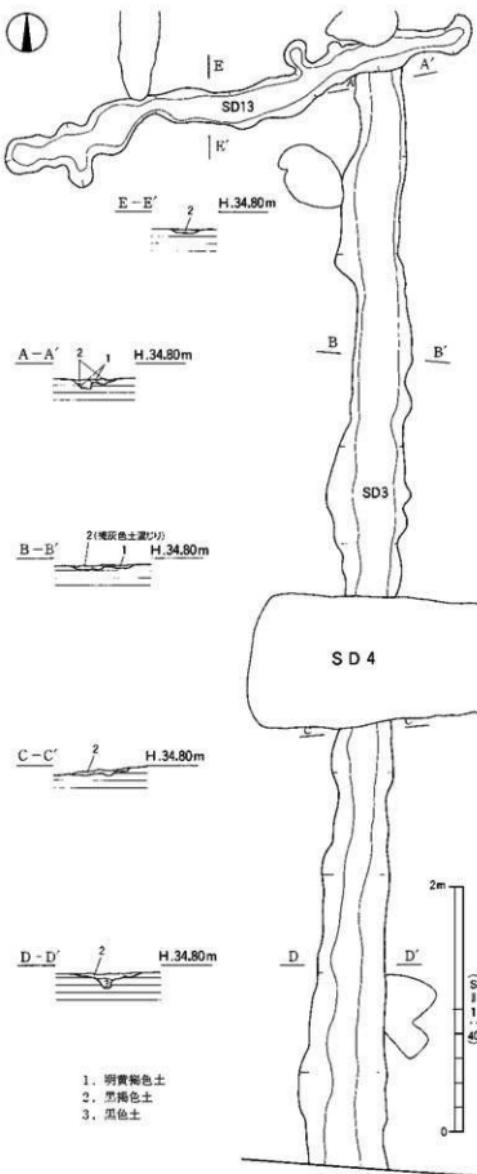
調査区南側のB 1～3区に位置し、S D 4・S D 13に切られ、南端は調査区外へ延びる。主軸はN-2°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長9.0m、上場幅40～70cm、深さ2～12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土が南久米町遺跡の掘立柱建物群と同じことから、8世紀後半とする。

S D 13 (第35図)

調査区南側のA 3～B 4区に位置し、S D 3を切り、柱穴・鉄跡に切られる。主軸はS-73°-Wで東西方向を指向し、規模は検出長3.9m、上場幅20～50cm、深さ2～8cmを測る。断面形態はU字状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土が南久米町遺跡の掘立柱建物群と同じことから、8世紀後半で S D 3よりも新しい時期とする。



第35図 SD 3・13測量図

(2) 中世

1) 掘立柱建物址

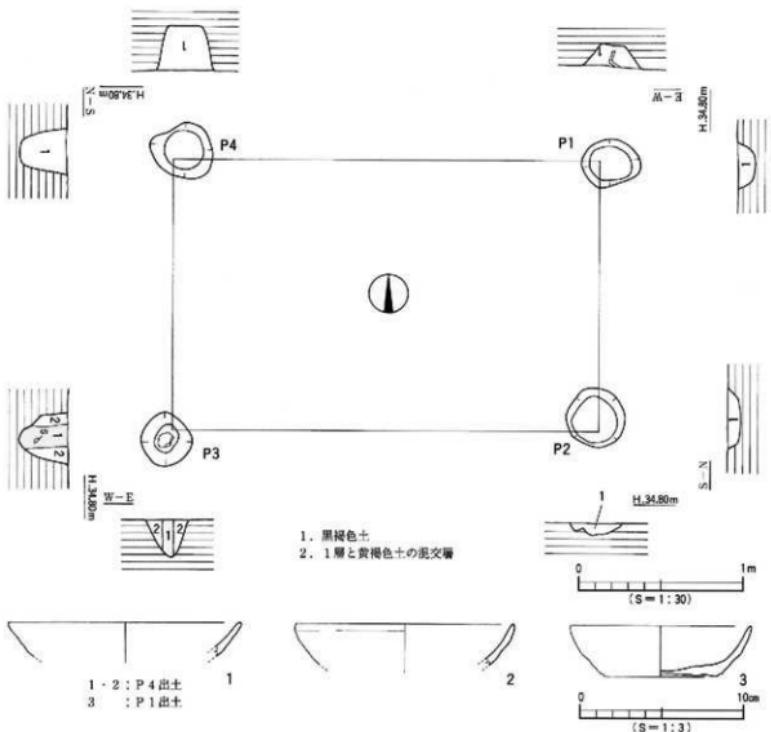
掘立1 (第36図、図版11)

調査区中央部のA5～B6区に位置する。1×1間の東西棟で、桁行2.6m、梁行1.7mを測る。東西棟で、主軸は真北を指向する。柱穴は円形～楕円形を呈し、直径30～40cm、深さ8～27cmを測る。P3から直径9cmの柱痕を検出し、その基底面に拳大の石が据えられていた。埋土は黒褐色土である。遺物はP1・P4から土師器の坏が出土している。

出土遺物 (第36図、図版13)

1～3は土師器の坏である。1は外傾する胴部に口縁端部は丸くおさまる。2は内湾気味の胴部に口縁端部は尖り気味である。3は平底の底部に回転糸切り後のすのこ痕があり、内湾気味の胴部から口縁部の内外面には回転ナデがある。

時期：出土遺物の特徴から13～14世紀とする。



第36図 掘立1測量図・出土遺物実測図

(3) 近世

2) 溝

SD 1 (第37図)

調査区南側のA2~3区に位置し、SK1に切られる。主軸はN-5°-Eで南北方向を指向する。規模は検出長7.0m、上場幅40~70cm、深さ1~3cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は土師器・陶器の小片が出土地する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から近世としか判らない。

SD 2 (第37図)

調査区南側のA1~B3区に位置し、跡に切られ、南端は調査区外に延びる。主軸はN-5°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長5.7m、上場幅40~90cm、深さ8~11cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は土師器・陶器の小片が僅かに出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から近世としか判らない。

SD 4 (第37図)

調査区南側のB2区に位置し、SD2・3を切り、東端は調査区外へ延びる。主軸はN-90°-Eで東西方向を指向し、規模は検出長2.0m、上場幅90~110cm、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土である。遺物は土師器・陶器の小片が僅かに出土する。

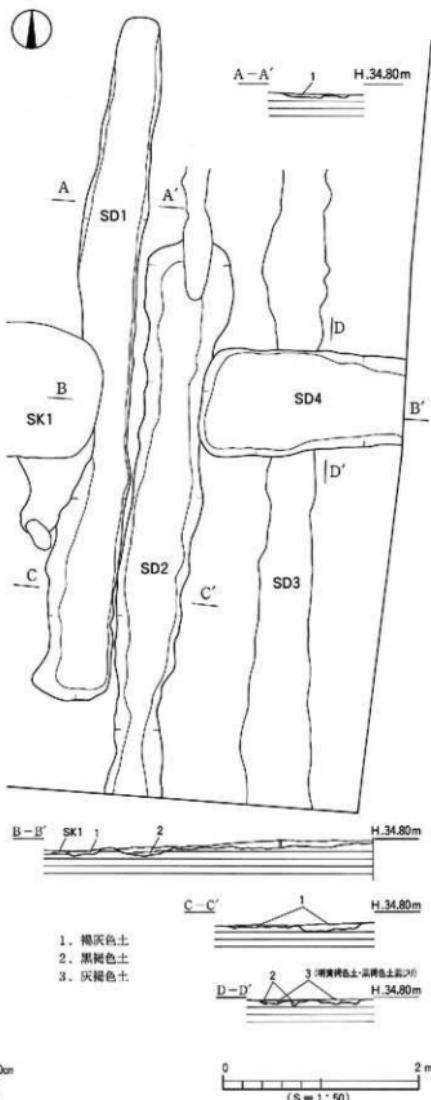
出土遺物（第38図、図版13）

4は陶器碗の底部である。下方にのびる削り出しの高台をもつ。

時期：出土遺物から18世紀代とする。



第38図 SD 4 出土遺物実測図



第37図 SD 1・2・4 測量図

SD 5 (第39図)

調査区中央部のA5~7区に位置し、SD 6に切られる。主軸はN-4°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長7.7m、上場幅40~70cm、深さ4~12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は土師器・須恵器・陶器・磁器片が出土する。

出土遺物 (第40図)

5・6は七輪器の鍋である。5は胸部と口縁部の境には屈曲をもち、口縁部は外方にのびる。6は口縁部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。7は肥前系の陶器碗である。内外面ともに浅黄褐色を呈する。

時期：出土遺物の特徴から、18世紀とする。

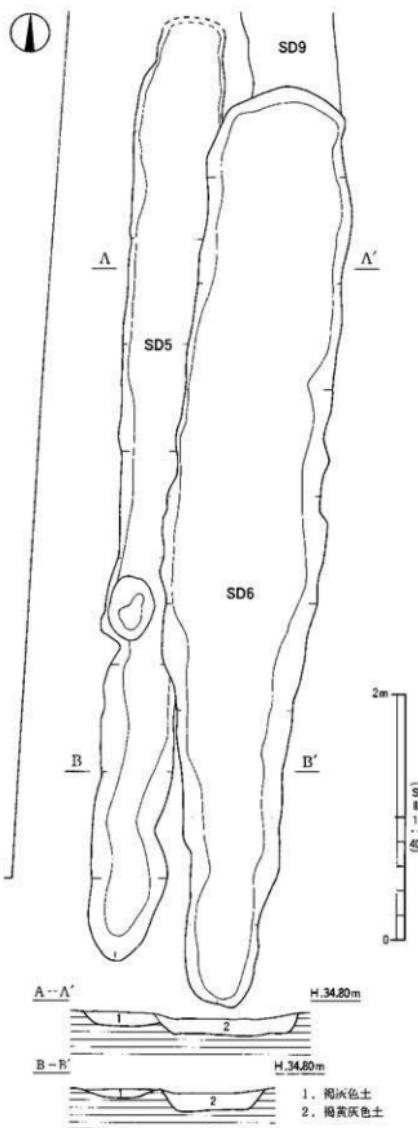
SD 6 (第39図)

調査区中央部のA5~B7区に位置し、SD 5・9を切る。主軸はN-5°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長7.5m、上場幅60~135cm、深さ15~18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、床面は平坦である。埋土は褐黄灰色土である。遺物は土師器・陶器・磁器に混じり軒丸瓦片が出土する。

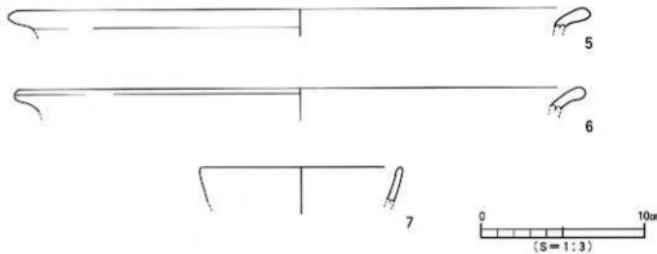
出土遺物 (第41図、図版13)

8は陶器のすり鉢である。上方に立ち上がった口縁部の外面に凹線が巡る。9は肥前系の磁器碗である。高台部と腰部に圓線が巡る。10は軒丸瓦である。内区に連珠がみられる。

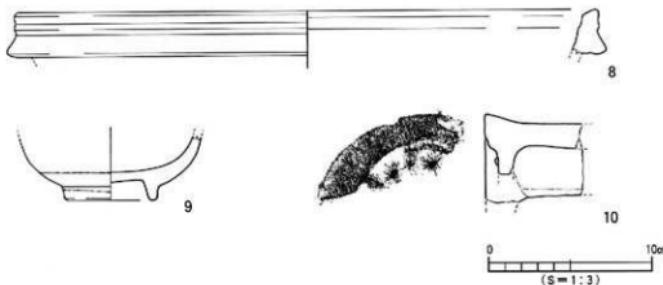
時期：出土遺物の特徴から18~19世紀とする。



第39図 SD 5・6測量図



第40図 SD 5出土遺物実測図



第41図 SD 6出土遺物実測図

SD 7 (第42図)

調査区北側のB7~8区に位置し、SD 9を切り、箇跡に切られる。主軸はN-1°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長4.5m、上場幅70~80cm、深さ5~11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は須恵器片が出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から近世としか判らない。

SD 8 (第42図)

調査区北側のA7~B10区に位置する。主軸はN-4°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長8.5m、上場幅40~60cm、深さ2~5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は上師器の小片が僅かに出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から近世としか判らない。

SD 9 (第42図)

調査区北側のB 7～9区に位置し、SD 6・7に切られる。主軸はN-3°-Eで南北方向を指向し、規模は検出長7.9m、上場幅70～80cm、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色灰色土である。遺物は土師器・陶器の小片が僅かに出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から近世としか判らない。

SD 11 (第43図)

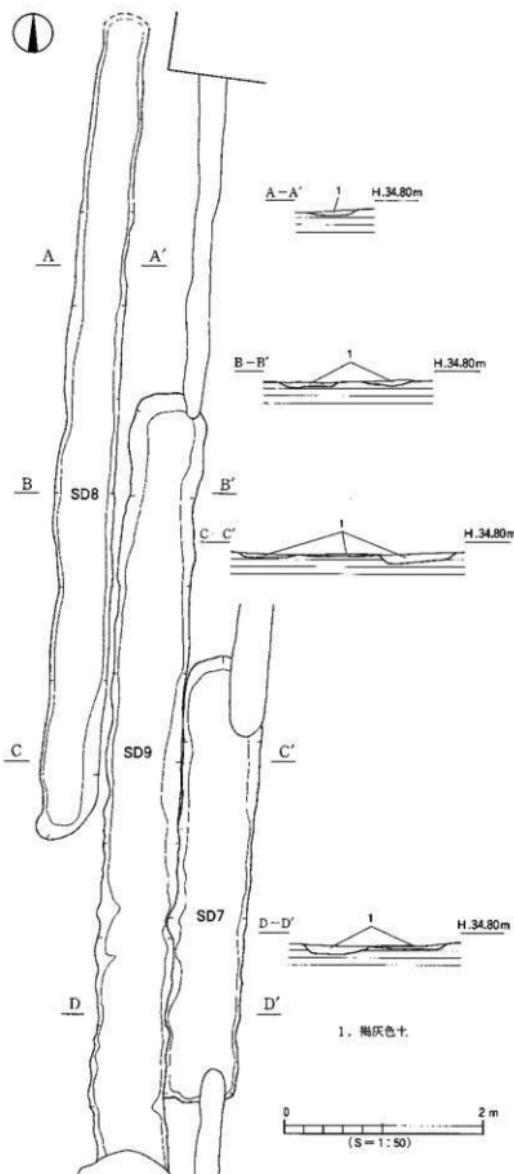
調査区東部のB 8～C 9区に位置し、南東端は調査区外へ延びる。主軸はN-32°-Wで、南東から北西方向を指向する。規模は検出長4.0m、上場幅40～75cm、深さ2～4cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色灰色土である。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土から近世としか判らない。

SD 12 (第43図)

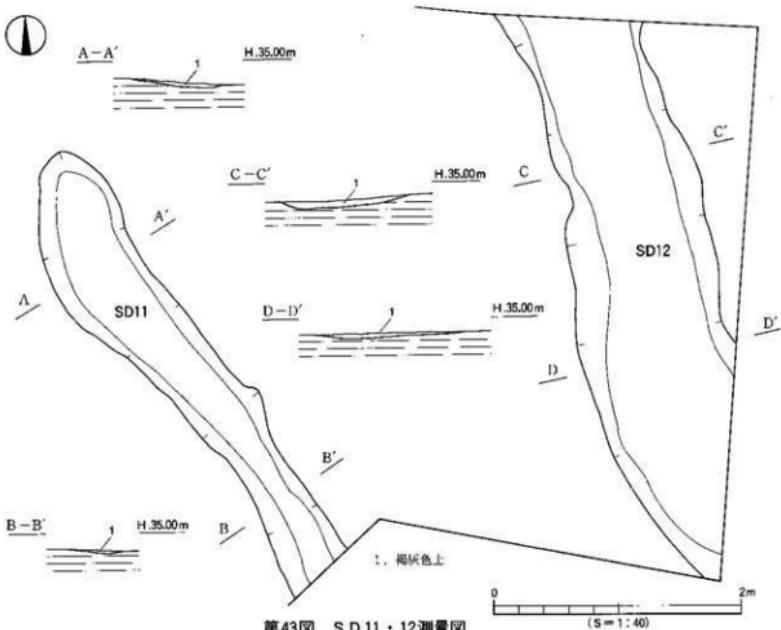
調査区東部のC 8～D 9区に位置し、両端は調査区外へ延びる。主軸はN-22°-Wで、南東から北西を指向する。規模は検出長4.9m、上場幅90～130cm、深さ2～6cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色灰色土である。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土から近世としか判らない。



第42図 SD 7・8・9 测量図

南久米町遺跡4次調査地



3) 土 坑

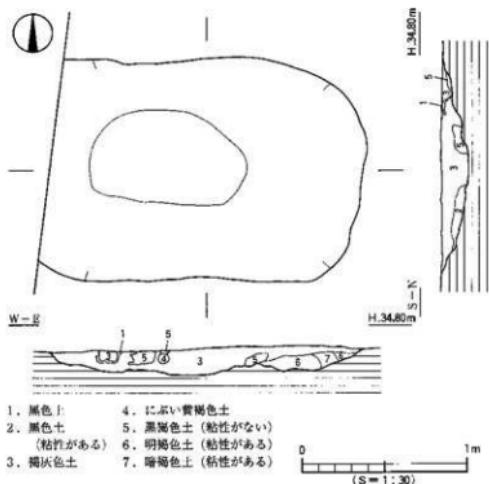
S K 1 (第44図)

調査区南西部のA2区に位置し、SD 1を切り、西側は調査区外へ延びる。規模は長軸1.9m、短軸1.4m、深さ16cmを測る。平面形態は隅円長方形、断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐灰色土である。遺物は土師器・陶器・布目瓦片が出土する。

出土遺物 (第45図)

11は須恵器の壺で、流入品である。平底の底部より外反気味に立ち上がり、内面に回転ナデ、外面に自然釉が付着する。

時期：出土遺物が小片であるため、切り合いや埋土から、近世としか判らない。



第44図 SK 1 測量図



第45図 SK 1出土遺物実測図

(4) 古代～近世

4) 柱穴

調査区中央部から南側にかけて20基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径15～90cm、深さは3～36cmを測る。埋土は黒褐色土～褐灰色土である。遺物は土器器の小片が出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から古代～近世にかけてのものである。

(5) 近世～近現代

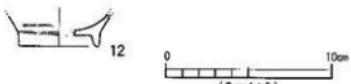
5) 鋤跡 (第46図)

調査区全域において10条を検出した。主軸は南北を指向し、断面形態はU字状～レンズ状を呈する。規模は検出長1.9～6.6m、深さ2～8cmを測る。埋土は褐灰色土～灰色土である。褐灰色土の鋤跡から磁器片が出土する。

出土遺物 (第47図)

12は肥前系の磁器碗である。外面の高台基部と腰部に圓線を描く。

時期：出土遺物や埋土から、18世紀～近現代にかけてのものである。



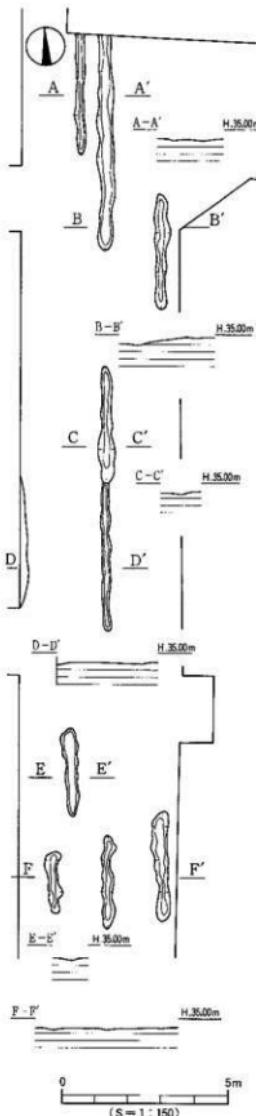
第47図 鋤跡出土遺物実測図

(6) その他

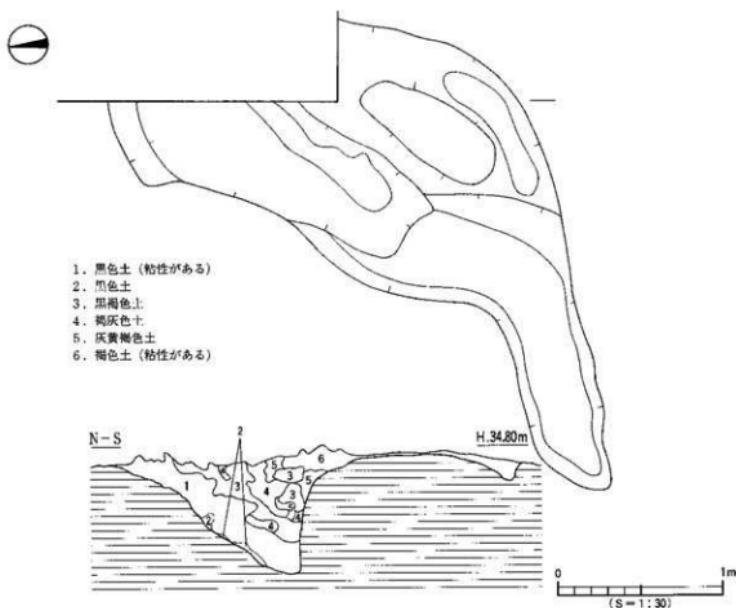
6) 倒木痕 (第48図)

調査区中央部東壁のB4～5区に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形態は三日月形で、断面形態は半円形を呈する。直横に地山の隆起を検出した。規模は検出長3.6m、深さ68cmを測る。土層は直立気味で、三日月形の外側から内側に向けて黒色、黒褐色、褐色の粘質土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定ができない。



第46図 鋤跡測量図



第48図 倒木痕測量図

(7) 第III層出土遺物 (第49・50図、図版14)

須恵器 13~16はこね鉢である。13・14は口縁外面が肥厚される。15・16は口縁端部が上方に拡張する。17は壺である。緩やかに外反する口縁部に端部は平らな面をなす。18は壺である。緩やかに外反する口縁部に端部は内傾する面をなす。19は坏蓋である。口縁部が下方に屈曲する。20は坏身である。「ハ」字状の貼り付け高台をもつ。

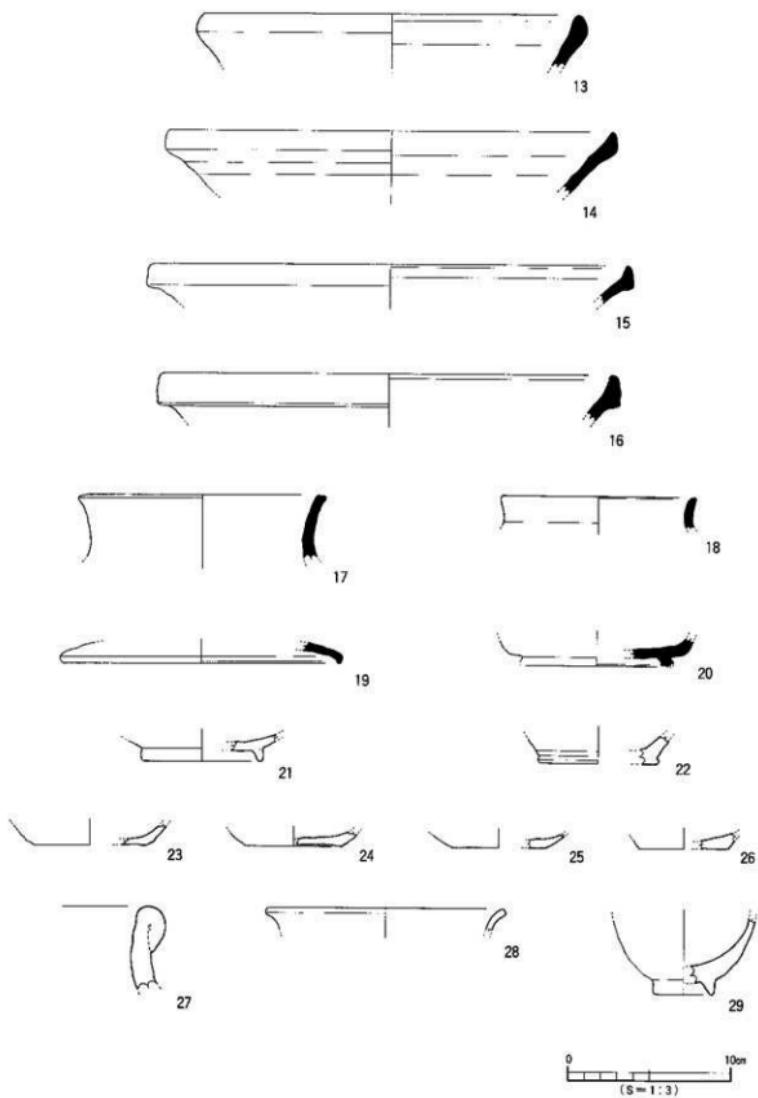
土師器 21は碗である。直立する貼り付け高台をもつ。22は坏である。平底の円盤高台の底部に回転糸切り痕がある。23~26は皿である。いずれも平底の底部に回転糸切り痕がある。

陶磁器 27は備前焼の甕である。口縁部に継に長い玉縁をもつ。28・29は磁器碗である。28は外傾する口縁部に端部はさらに外反する。龍泉窯。29は削り出しの高台をもつ。

石製品 30は両刃石斧の完存品である。横断面形は台形状を呈し、刃部と基部は同じ幅である。長さ8.5cm、幅3.9cm、最大厚2.1cm、重さ115.9gを測る。石材は頁岩質。

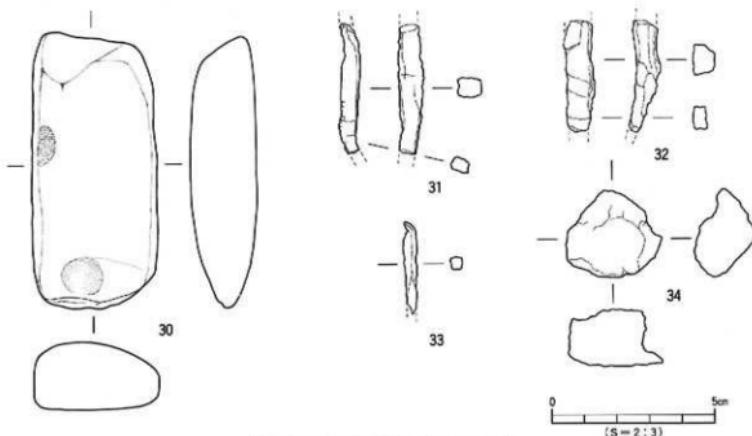
鉄製品 31~33は鉄釘である。33は頭部が残存している。34は鉄塊である。

遺構と遺物



第49図 第III層出土遺物実測図（1）

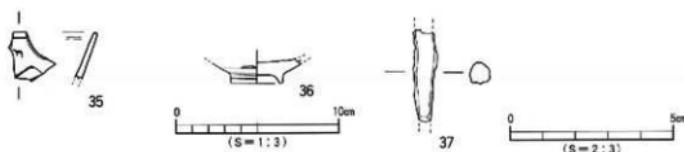
南久米町遺跡4次調査地



第50図 第III層出土遺物実測図（2）

（8）第II層出土遺物（第51図、図版14）

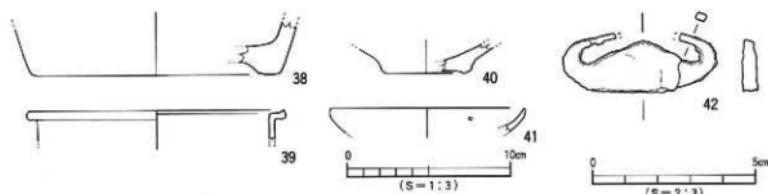
35・36は肥前系の磁器碗である。35は口縁部の内外面に圓線、胴部外面に山形文が描かれる。36は高台部と腰部の外面に圓線が描かれる。37は鉄釘である。



第51図 第II層出土遺物実測図

（9）第I層出土遺物（第52図、図版13）

38は土師器の火鉢の脚部で、断面形が逆台形状を呈する。39・40は陶器である。39は鍋で、直立した上側部に口縁部は直角に屈曲し、端部は上方に肥厚される。40は鉢で、内外面に明オリーブ灰色の施釉がみられる。41は肥前系の磁器皿であり、内面に染付けの一部がみられる。42は鉄製の金具の一種と思われる。



第52図 第I層出土遺物実測図

4. 小 結

今回の調査では、掘立柱建物址・土坑・溝・柱穴・鍛跡・倒木痕を検出し、土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦片・石製品・鉄製品が出土した。

【層 位】

第Ⅰ層は水田、第Ⅱ層は水田床土である。第Ⅲ層は東側から地山が傾斜する南西部にかけて堆積しており、土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品が出土する。第Ⅳ層は調査区の中央部から南側で、北東方向から南西方向に向けて傾斜し、地形全体が凹んだ土地に堆積している。この層は無遺物層で粘質が強く、アカホヤ火山灰の二次堆積の可能性をもつ。第Ⅴ層上面で遺構を検出したが、第Ⅴ層の西側2/3は近現代の開墾行為によって水平に削半されている。

【遺 構】

古 代

S D 3は南北に延びる溝であるが、南久米町遺跡で検出された掘立柱建物群とはほぼ同じ軸方向や埋土などから、掘立柱建物群と関連する施設の可能性をもつ。

S D 10は埋土の堆積状況から、溝を構築した後の時期にも溝状の掘り込みが存在していたことが判る。溝の構築時期を特定する遺物の出土はないが、溝の形態や埋土などから、南久米町遺跡2次調査で検出されたS D 1が本調査地まで延びることが判った。両遺跡で検出された両端の距離は80mを測り、さらに東西方向に延びる様相を呈している。また、直線的に延びるのではなく、僅かに蛇行を示すことが判る。また、2次調査地 S D 1と同様に S D 10の北側も、北へ向けて傾斜する特徴をもち、この傾斜も溝に伴うものと考えられる。

中 世

掘立柱建物址は1間×1間の小型のもので、倉庫的な施設と考えられる。また、第Ⅲ層中から土師器や東播系の須恵器・備前焼などが出土していることなどから、調査地周辺には掘立1以外にも遺構が存在していたことが窺える。

近 世

S D 1とS D 9、S D 5とS D 8は、同軸上にあり断面形状や埋土などから、それぞれ同一の溝が延びているものと判断する。これらの溝は並行した位置関係であり、区画性をもつ溝として造り替えられたことも考えられる。S D 6周辺の第Ⅴ層は良質の粘土層となっている。S D 6は、その粘土層を抜く様に直線的に掘り込まれている形状から、粘土の採掘坑であると考えられる。

近世～近現代

鍛跡は、南北方向にあり、埋土から近世～近現代にかけてのものである。このことから、当地において近世から農耕が行われていたことが判る。

【参考文献】

- 山城武志・高尾和長 2000「南久米町遺跡」・「南久米町遺跡2・3次調査地」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄()：復元推定値

形態・施文欄：土器の各部位名称を略記。

例) 高→高台部、底→底部

胎土・焼成欄：胎土欄では混和剤を略記した。

例) 長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。(単位:mm)

焼成欄の略記について。○→良好、○→良、△→不良。

表16 据立柱建物址一覧

据立	規模 (間)	方 向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	1×1	東西	2.6	2.6	1.7	1.7	南北	4.42	13~14C	

表17 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 (m)		床面積 (m ²)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				長さ(長径) × 幅(短径) × 深さ	横幅(m)					
1	A 2	隅円及方形	レンズ状	1.9×1.4×0.16	25.1	褐色土	土器・陶器	瓦	近世以降	SD 1 を切り、調査区外へ延びる

表18 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m)		方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考	(1)
			長さ × 幅 × 深さ	横幅(m)						
1	A 2~3	皿 状	7.0×0.4~0.7×0.01~0.03		南北	褐色土+	土器・陶器	近 世	SK 1 に切られる	
2	A 1~B 3	レンズ状	5.7×0.4~0.9×0.08~0.11		南北	褐色土+	土器・陶器	近 世	調査区外へ延びる	
3	B 1~3	レンズ状	9.0×0.4~0.7×0.02~0.12		南北	黒褐色土	ナシ	8 C 後半	SD 4~13 に切られ、調査区外へ延びる	
4	B 2	皿 状	2.0×0.9~1.1×0.06		東西	灰褐色土	土器・陶器	18 C	調査区外へ延びる	
5	A 5~7	皿 状	7.7×0.4~0.7×0.04~0.12		南北	褐色土上	土器・陶器	18 C	調査区外へ延びる	
6	A 5~B 7	複合形状	7.5×0.6~1.35×0.15~0.18		南北	褐色灰褐色土	土器・瓦 陶器等	18~19 C	SD 5~9 を切る	
7	B 7~8	皿 状	4.5×0.7~0.8×0.05~0.11		南北	褐色土	須恵	近 古	SD 9 を切り、鰐跡に切られる	
8	A 7~B 10	皿 状	8.5×0.4~0.6×0.02~0.05		南北	褐色土	土器	近 世		
9	B 7~9	皿 状	7.9×0.7~0.8×0.1		南北	褐色土	土器・陶器	近 世	SD 6~7 に切られる	
10	A 10~B 11	レンズ状	1.3×4.1×0.57		東西	褐色土 明灰褐色土	土器・須恵	古代前秦	調査区外へ延びる	

造構・遺物一覧

満一覧

(2)

満 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m)		方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
			長 さ	幅 × 深 さ					
11	B 8 ~ C 9	レンズ状	4.0 × 0.4 ~ 0.75 × 0.02 ~ 0.04		東南 ~ 北西	褐灰色土	ナシ	近世	調査区外へ延びる
12	C 8 ~ D 9	レンズ状	4.9 × 0.9 ~ 1.3 × 0.02 ~ 0.06		東南 ~ 北西	褐灰色土	ナシ	近世	調査区外へ延びる
13	A 3 ~ B 4	U字状	3.9 × 0.2 ~ 0.5 × 0.02 ~ 0.08		東西	黒褐色土	ナシ	8C後半	SD3を切り、柱穴・窓跡に切られる

表19 挖立1出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色 調 (外 面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	坏	口径(14.1) 残高 2.1	外傾する口縁部に、口縁端部は丸く おさまる。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	密 ○		
2	坏	口径(13.2) 残高 2.55	内湾気味の胴部に、口縁端部は尖 り気味。	マメツ	マメツ	淡青褐色 褐灰色 灰白色	密 ○		
3	坏	口径(10.9) 残高 3.1 底径 6.8	平底の底部に、回転系切り後のす ご痕がある。	回転ナデ ⑥底軸系切り →すのこ	回転ナデ ヨコナデ	淡黄色 灰白色	石(1)・長(1~3) ○		13

表20 SD4出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色 調 (外 面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
4	碗	底径(4.8) 残高 1.5	削り出しの高台。	削り出し	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		13

表21 SD5出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色 調 (外 面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
5	土鍋	口径(34.2) 残高 1.2	胴部と口縁部の境に凹曲をもつ、 口縁部は外方にのびる。	マメツ	マメツ ヨコナデ	褐灰色 黄灰色		長(1~3) ○	
6	土鍋	口径(34.0) 残高 1.4	口縁部は外上方にのび、端部は丸 くおさまる。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	密 ○		
7	碗	口径(12.0) 残高 2.2	内湾する口縁部に、端部は丸くお さまる。	施 輪	施 輪	淡黄褐色 淡黄褐色	密 ○		

表22 SD6出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色 調 (外 面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
8	罐	口径(35.0) 残高 2.8	口縁部の外面に凹線が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰赤色 赤褐色	密 ○		13
9	碗	底径(5.0) 残高 3.9	高台部と腰部に圓線が巡る。	施 輪	施 輪 ⑥削り出し	灰オーラー色 灰オーラー色	密 ○		13

南久米町遺跡4次調査地

表23 SD6出土遺物観察表（軒丸瓦）

番号	瓦当部		外区外縁幅(cm)	珠文		瓦当部～丸瓦部長(cm)	回版
	径(cm)	厚さ(cm)		高さ(cm)	径(cm)		
10	(14.0)	0.9~2.3	1.5~2.1	0.2	0.5	5.9	13

表24 SK1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	回版
			外 面	内 面				
11	坏 底径(13.7) 残高 2.55	外側に自然釉が付着する。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	細粒 ○	(外面) 自然釉	

表25 錐跡出土遺物観察表（土製品）

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	回版
			外 面	内 面				
12	碗 底径(4.6) 残高 1.95	高台基部と腰部に墨線が並る。	施 粘	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	(外面) 施付	

表26 第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	回版
			外 面	内 面				
13	こね鉢 口径(22.6) 残高 3.1	口縁外面が肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ マメツ	暗オリーブ灰色 灰褐色	石(?)・長(1~3) チャート ○	(外面) 自然釉	14
14	こね鉢 口径(26.8) 残高 3.8	口縁外面が肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1~3) ○		14
15	こね鉢 口径(28.7) 残高 2.35	口縁端部が上方に抜張する。	回転ナデ	マメツ	灰褐色・青灰色 灰色	石・長(1) ○	(外面) 自然釉	14
16	こね鉢 口径(37.2) 残高 2.8	口縁端部が上方に抜張する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○		14
17	壺 口径(14.0) 残高 4.0	縁やかに外反する口縁端部は、 平らな面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰オリーブ色	密 ○	(内外面) 自然釉	
18	壺 口径(11.6) 残高 1.85	縁やかに外反する口縁端部は、 内側する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	粗粒 ○		
19	壺蓋 口径(16.7) 残高 1.25	口縁部が下方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
20	壺身 基部径(9.0) 残高 1.7	「ハ」字状の貼り付け窓台をもつ。	回転ナデ ナデ	回転ナデ ヨコナデ	灰色 灰色	長(1) ○		14
21	碗 高台径(7.0) 残高 1.65	直立する貼り付け窓台をもつ。	回転ナデ マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	粗粒 ○		
22	壺 底径(7.0) 残高 1.8	円盤高台の底部に、回転条切り 痕がある。	回転ナデ マメツ	回転ナデ マメツ	灰黄色 灰黄色	長(1)・粗粒 ○		

出土遺物観察表

表27 第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	(2) 図版
				外 面	内 面				
23	皿	底径 (6.8) 残高 1.2	平底の底部に、回転糸切り痕がある。	マツツ	マツツ	灰白色 灰白色	細粒 ○		
24	皿	底径 (5.8) 残高 0.9	平底の底部に、回転糸切り痕がある。 ※回転糸切り	回転ナデ ナデ		浅黄褐色 浅黄褐色	細粒 ○		
25	皿	底径 (5.6) 残高 0.85	平底の底部に、回転糸切り痕がある。	マツツ ※回転糸切り		浅黄褐色 灰白色	細粒 ○		
26	皿	底径 (5.4) 残高 1.0	平底の底部に、回転糸切り痕がある。	マツツ ※回転糸切り	マツツ	灰黄褐色 にぶい褐色	長(3)・細粒 ○		
27	甕	残高 5.1	口縁部に土縁をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	細粒 ○	(外内面) 白自然釉	14
28	甕	口径 (14.2) 残高 1.35	外唇する口縁部に、端部はさらりと外反する。	施 稲	施 稲	明オリーブ色 明オリーブ色	密 ○		
29	甕	底径 (3.5) 残高 4.5	切り出しの高台をもつ。	施 稲	施 稲	灰白色 明緑灰色	密 ○		14

表28 第Ⅲ層出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存状態	法量				備考	(1) 図版	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
30	石斧	ほぼ完形	頁岩	8.45	3.85	2.1	115.9		14

表29 第Ⅲ層出土遺物観察表（鉄製品）

番号	器種	遺存状態	法量				備考	(2) 図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
31	鉄釘	頭部・先端部欠損	4.05	0.5~0.8	0.6	4.023		14
32	鉄釘	頭部・先端部欠損	3.45	0.4~0.75	0.65	5.119	サビ付青	14
33	鉄釘	先端部欠損	2.85	0.15~0.45	0.4	1.09		14
34	鉄塊		2.7	2.95	1.75	26.179		14

表30 第Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	(1) 図版
				外 面	内 面				
35	甕	底径 3.02 残高 3.02	外面に青花文と、口縁の内外面に墨模が満る。	施 稲	施 稲	灰白色 灰白色	密 ○	(外内面) 染付	14
36	甕	底径 (3.1) 残高 1.5	高台部と要部の外面に墨模が満る。	施 稲	施 稲	灰白色 灰白色	密 ○	(外面) 染付	14

南久米町遺跡4次調査地

表30 第II層出土遺物観察表（鉄製品）

番号	器種	遺存状態	法量			備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
37	鉄釘	頭部・先端部欠損	2.85	0.4~0.7	0.65	2.155 サビ付着	14

表31 第I層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
38	火鉢	底径(15.0) 残高 3.2	底部端に高台をもつ。 ※曳り→ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石(1~3)-長(1) チャコト金 ○		13
39	壺	口径(15.6) 残高 1.8	直立した上開口に、口縁部は直 角に屈曲し、壺部は上方に肥厚 される。	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰白色・黄褐色 灰白色・浅黄色	青 ○		13
40	鉢	底径(14.8) 残高 1.75	内外面に明オリーブ灰色の釉を 施す。	施釉	施釉	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	長(1)-細鉢 ○		
41	皿	口径(11.8) 残高 1.5	内面に染付がある。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	青 ○ (内面) 染付		

表32 第I層出土遺物観察表（鉄製品）

番号	器種	遺存状態	法量			備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
42	金具	左右先端部欠損	4.7	0.15~1.6	0.24~0.5	5.489	

第4章 成果と課題

今回調査した2遺跡からは、弥生時代から近世までの集落構造や遺物を確認し、同時代における北久米・南久米地区の集落の一部が明らかとなった。

1. 土層

北久米遺跡・南久米町遺跡は来往台地上の微高地上に立地している。地表面は畑地であり、両遺跡ともに近現代の削平により包含層や構造の遺存状況は良くない。北久米遺跡2次調査地では微高地上が南北方向に緩やかに傾斜する傾斜地となり、古墳時代から中世における包含層の堆積を検出している。南久米町遺跡4次調査地では、土色や土質などからアカホヤ火山灰と考えられる二次堆積層を確認したことより、この地域に同火山灰の降灰の可能性をもつ。

2. 弥生時代

北久米遺跡2次調査地にて弥生時代後期の竪穴式住居址が検出されている。北隣の福音小学校構内遺跡においても同時期の大規模な溝をはじめとした集落構造が検出されており、この集落が南側へ展開することが確認できた。

3. 古墳時代

福音小学校構内遺跡では中期頃から大集落が出現しており、北久米遺跡2次調査地から竪穴式住居址や掘立柱建物址を検出し、微高地上に広がる大集落が南側の傾斜面にも広がることを確認した。

4. 古代

南久米町遺跡4次調査地の南隣に位置する南久米遺跡からは、8世紀後半以降の掘立柱建物群が検出され巖書土器が出土している。この掘立柱建物群は久米官衙遺跡群に後続する古代官衙の可能性をもつ建物群と考えられており、SD3はこの掘立柱建物群に並行する位置関係であり、掘立柱建物群に伴う施設の可能性をもつ。SD10は東方約80mの南久米町遺跡2次調査地で検出したSD1のつながりであり、南久米町遺跡の掘立柱建物群を区画する様相が高くなると考えられる。

5. 中世

北久米遺跡2次調査地SD1は直角よりやや鋭角的に屈曲する溝であり、北端は福音小学校構内遺跡2a区の西端で検出されている南北方向を指向する溝につながる可能性が高い。また、この溝の内側には埋め堀が検出されており、溝で区画された中世集落の存在が窺える。

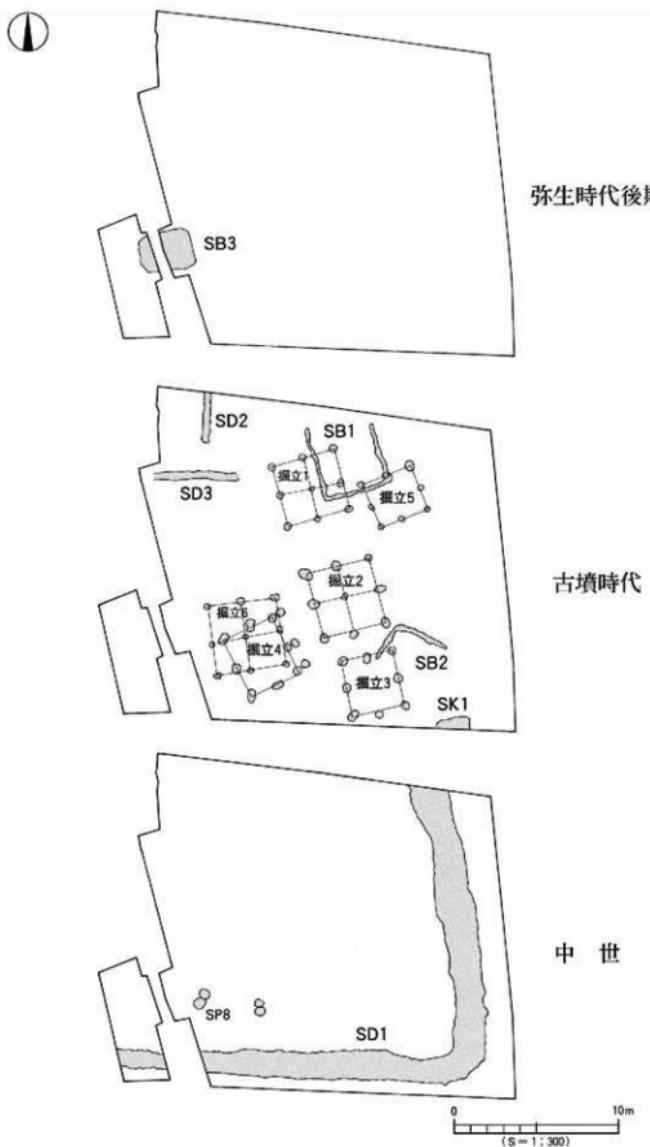
南久米町遺跡4次調査地周辺での当該期の検出例は少なく、西約180mの北久米町屋敷遺跡から掘立柱建物址1棟や溝・土坑などを検出しておらず、北久米町屋敷遺跡から東に広がる中世集落の存在を示すものである。

6. 近世

南久米町遺跡4次調査地周辺の来往台地上には良質の粘土層が堆積しているが、粘土の採掘坑を検出したことで、近世には粘土が採掘されていたことが明らかとなった。

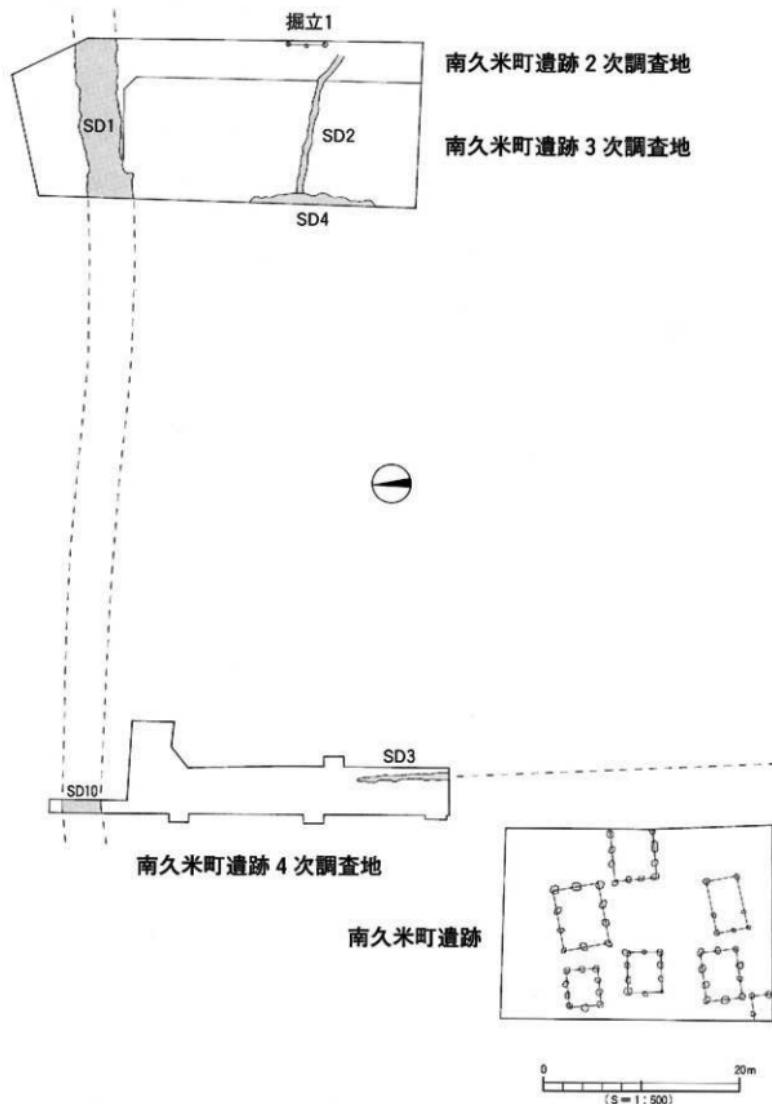
今回の調査により、福音小学校構内遺跡が立地する微高地上に展開する弥生時代や古墳時代の拠点集落構造は、南側の傾斜面にも広がることを確認した。しかし、竪穴式住居址や掘立柱建物址などは時期を特定しうる遺物が少なく、詳細な時期は不明なままである。今後の周辺の調査では、集落の範囲や構造を明確にすべきである。南久米町遺跡で検出された古代の掘立柱建物群や、南久米町遺跡2次調査地で検出した東西方向に延びる溝と本遺跡で検出した溝の広がりや、溝の北側の様相を解明することが課題となる。

成 果 と 課 題



第53図 北久米遺跡 2次調査地の時代毎の変遷

成 果 と 課 題



第54図 古代の主要遺跡配置図

成 果 と 課 題

【参考文献】

- 橋本雄一 1994 「北久米浮遊寺遺跡－3次調査地－」『松山市埋蔵文化財調査報告書42』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・武正良浩 1995 「福音小学校構内遺跡－弥生時代編－」『松山市埋蔵文化財調査報告書50』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 梅木謙一編 1996 「福音寺地区の遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告書52』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 河野史知編 1998 「福音寺地区の遺跡Ⅱ」『松山市埋蔵文化財調査報告書67』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 加島次郎 1999 「乃万の裏遺跡－2次調査地－」『松山市埋蔵文化財調査報告書72』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 山城武志・高尾和長 2000 「南久米町遺跡」・「南久米町遺跡2・3次調査地」『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 武正良浩 2003 「福音小学校構内遺跡－古墳時代以降編－」『松山市埋蔵文化財調査報告書91』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影にはやぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパー・アンギュロン90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28~85mm他
フィルム	白 黒 プラスXパン・ネオパンSS・アクロス		
	カラー エクタクロームEPP・RDP III		

2. 遺物は、4×5判または6×9判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュ-45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマーS 240mm F 5.6他
ストロボ	コメットCA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒プラスXパン・ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキーMD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F 5.6 A・50mm F 2.8 N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製版	写真図版175線
印刷	オフセット印刷
用紙	マットコート135kg
製本	アジロ綴

【参考】『埋文写真研究』vol. 1~13 『報告書制作ガイド』

〔大西 朋子〕

北久米遺跡 2次調査地



1. 調査地全景（北東より）



2. 遺構検出状況（西より）

北久米遺跡 2 次調査地

図版二



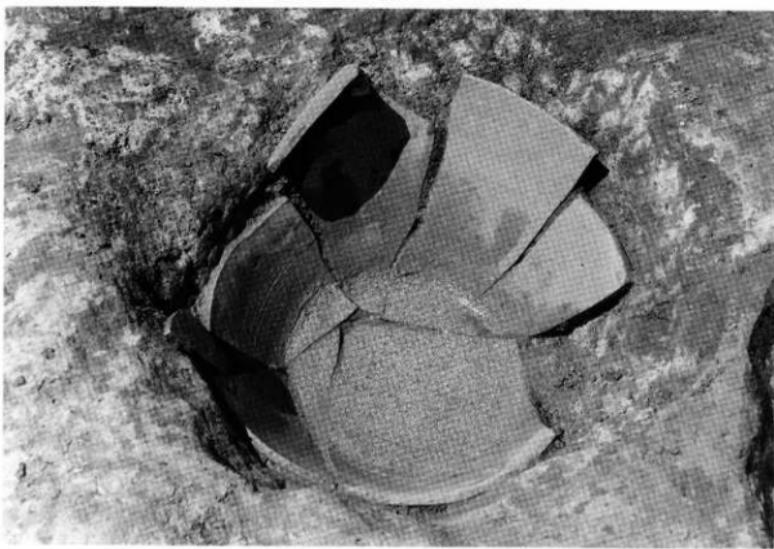
1. 南壁土層（北より）



2. 調査状況（北より）



1. S P 7・8 半掘状況（東より）



2. S P 8 遺物出土状況（東より）

北久米遺跡 2次調査地

四版四



1. 西拡張区遺構検出状況（北より）



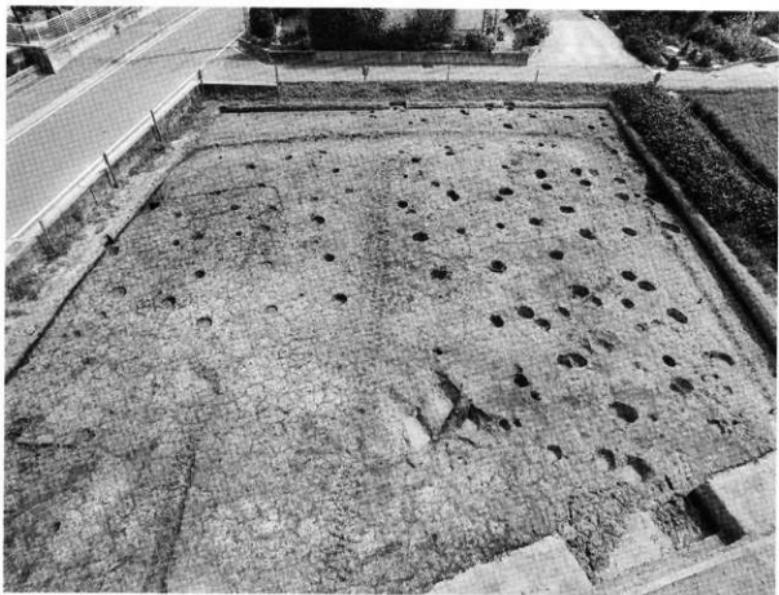
2. SB3遺物出土状況（西より）

北久米遺跡 2次調査地

図版五



1. 西拡張区完掘状況（北より）



2. 遺構完掘状況（西より）

北久米遺跡 2次調査地

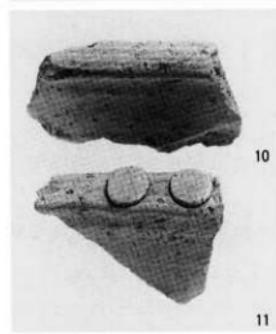
圖版六



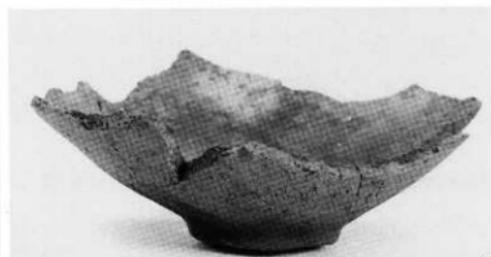
8



14



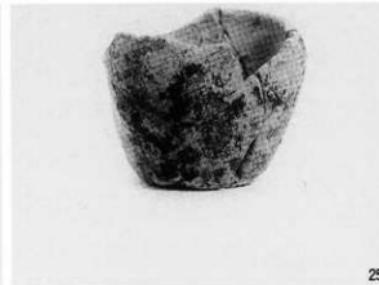
10



15



24

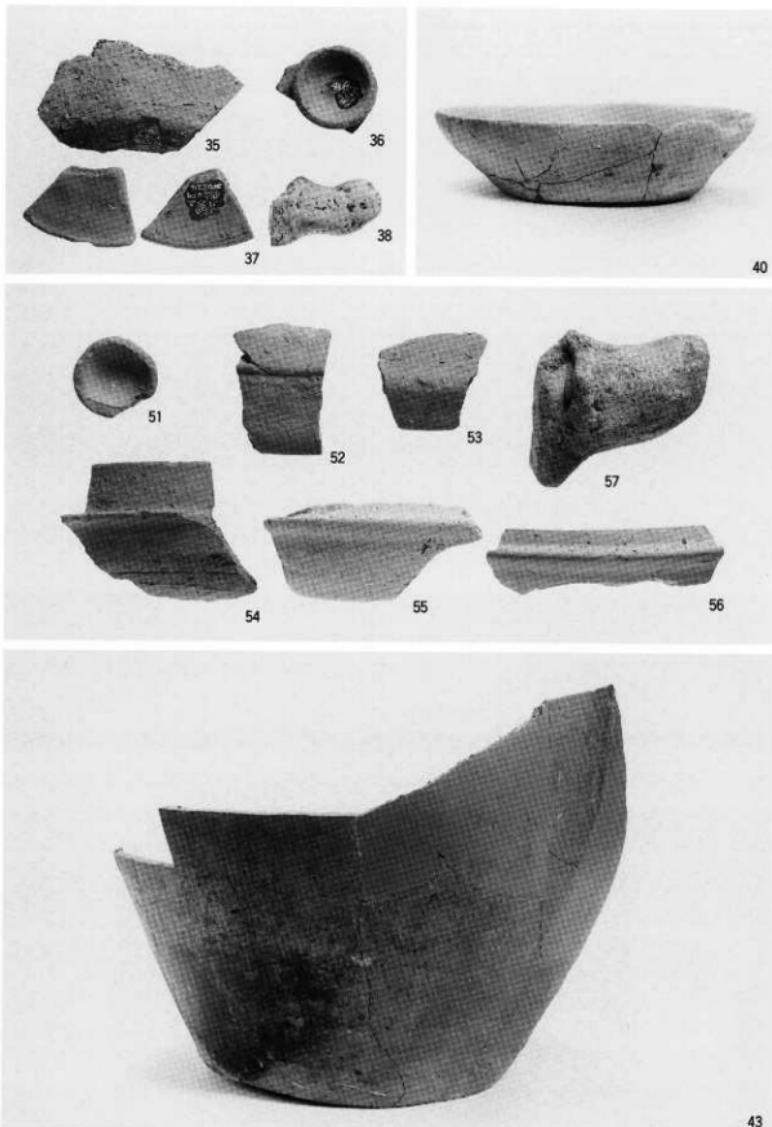


25

1. SB 3出土遺物

北久米遺跡 2 次調査地

図版七



1. 掘立4 (35~38)・S D 1 (40)・第V層(51~57)・S P 8 (43)出土遺物

南久米町遺跡 4 次調査地

図版八



1. 調査地全景（北より）



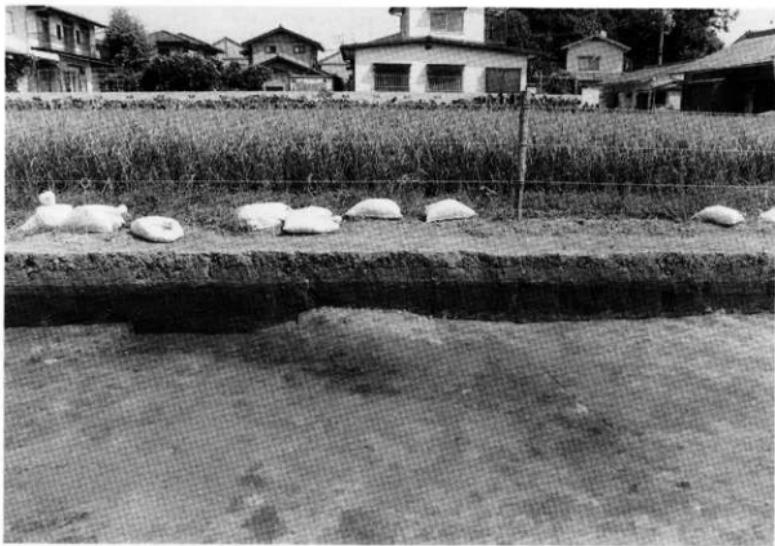
2. 表土掘削状況（南より）

南久米町遺跡 4 次調査地

図版九



1. 調査状況（南より）



2. 東壁土層（西より）



1. 遺構検出状況（南より）



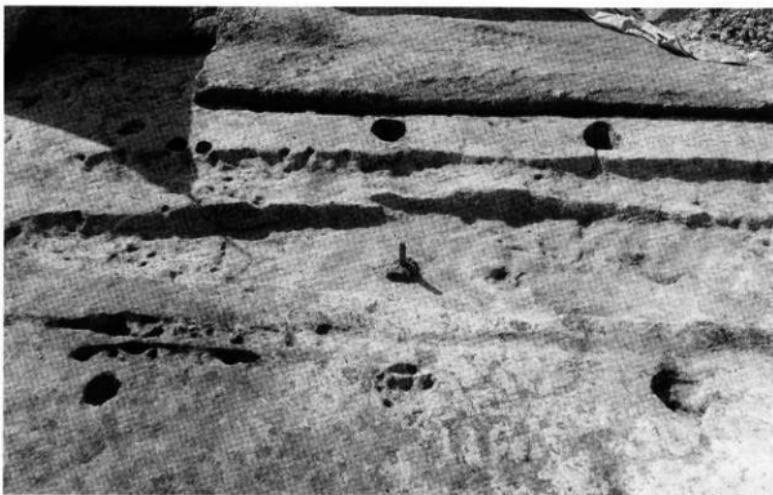
2. SD 10検出状況（南東より）

南久米町遺跡 4 次調査地

図版一



1. 遺構完掘状況（北東より）



2. 掘立 1 完掘状況（東より）

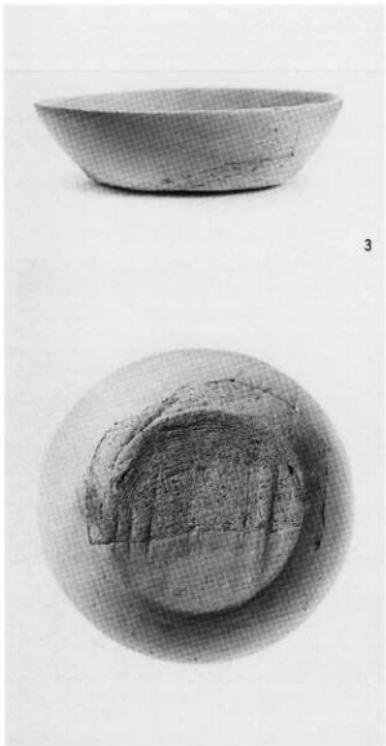
南久米町遺跡 4 次調査地



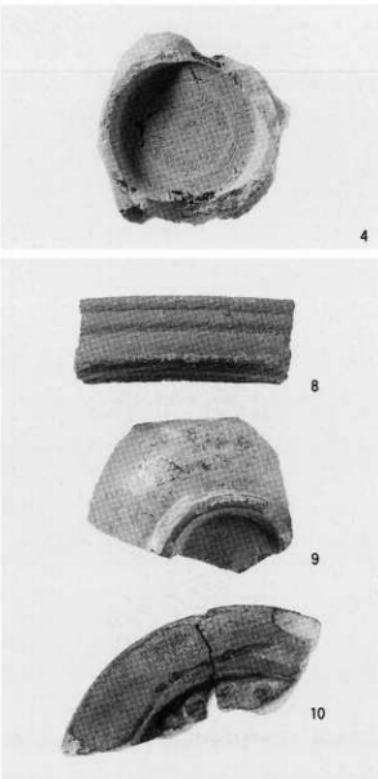
1. SD 10完掘状況（東より）



2. SD 10土層（西より）



1. 掘立 1 出土遺物



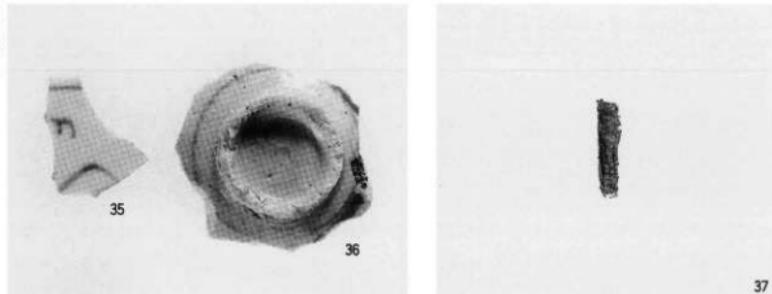
2. SD 4 (4)・SD 6 (8~10)・第 I 層(38・39・42)出土遺物



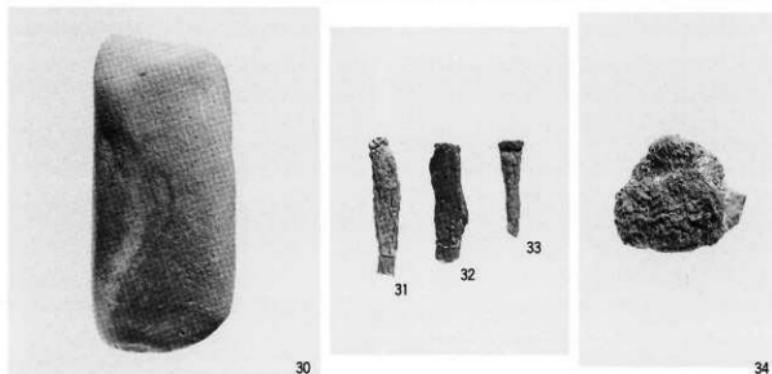
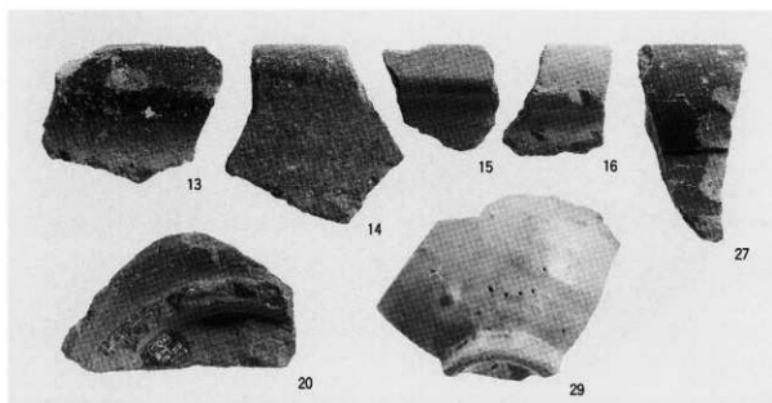
2. SD 4 (4)・SD 6 (8~10)・第 I 層(38・39・42)出土遺物

南久米可遺跡4次調査地

図版一四



1. 第II層出土遺物



2. 第III層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きたくめいせき	みなみくめまちいせき
書名	北久米遺跡2次調査地・南久米町遺跡4次調査地	
副書名		
卷次		
シリーズ名	松山市文化財調査報告書	
シリーズ番号	第96集	
編著者名	河野史知・大西朋子	
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	
所在地	市教委:〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文:〒791-8032 松山市南院町乙67-6 TEL 089-923-6363	
発行年月日	西暦2004年3月31日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"/>	東經 °'\"/>	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
北久米2次	松山市北久米町 766番1	38201	33°49'07"	132°47'41"	20000710～ 20000929	639.62	宅地開発
南久米町4次	松山市南久米町 420番地1 422番地	38201	33°48'45"	132°48'10"	20010917～ 20011016	590.37のうち 244.14	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北久米2次	集落	弥生	弥生：竪穴式住居址	弥生土器	弥生時代～古墳時代、中世の集落
		古墳	古墳：竪穴式住居址、掘立柱建物址	土師器、須恵器	
		中世	中世：溝、柱穴	陶器	
南久米町4次	集落	古代	古代：溝	土師器、須恵器	古代～中近世の集落
		中世	中世：掘立柱建物址	土師器	
		近世	近世：溝	土師器、陶磁器	

松山市文化財調査報告書 第96集

北久米遺跡 2次調査地 南久米町遺跡 4次調査地

平成16年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 松山市濱町7丁目1-8
TEL (089) 941-9111

